

## 育徳園の履歴とあり方

【素案】

育徳園の在り方検討WG

平成 28 年 1 月

## 育徳園の在り方検討 WG について

[委員] ※委員名右のアルファベットは記事の執筆担当略号。目次および各記事のタイトル脇に標記。

主査 横張 真 教授（工学系研究科）  
 邑田 仁 教授（理学系研究科）  
 木下 直之 教授（人文社会系研究科）[K]  
 尾崎 信 助教（工学系研究科）[O]  
 土屋 一彬 助教（農学生命科学研究科）[T]  
 原 祐一 助手（埋蔵文化財調査室）[H]  
 事務局 施設部施設企画課 寅ヶ口課長、戸塚係長、藤塚主任 [S]

### [検討経緯]

日付	会議名称	内容
H27. 4. 15	第 1 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ WG の目的、育徳園の現状について</li> <li>・ 育徳園の歴史に関する既往史料等について</li> <li>・ とりまとめの方針について</li> </ul>
H27. 6. 16	第 2 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 三四郎池のランドスケープリノベーション成果報告書について</li> <li>・ 近代庭園の評価に関する考え方について</li> <li>・ 本郷地区キャンパス・植栽管理計画について</li> </ul>
H27. 8. 7	執筆者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 構成と執筆担当割り振りについて</li> </ul>
H27. 8. 18	執筆者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 執筆状況の共有と今後の執筆方針について</li> </ul>
H27. 9. 7	第 3 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医学部本館北側三四郎池入り口舗装について</li> <li>・ 本書の内容について</li> <li>・ 樹木調査について</li> </ul>
H27. 10. 15	執筆者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 執筆状況の共有と今後の執筆方針について</li> </ul>
H27. 10. 29	第 4 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医学部本館北側三四郎池入り口舗装について</li> <li>・ 本書の内容について</li> </ul>
H27. 11. 16	執筆者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 執筆状況の共有と今後の執筆方針について</li> </ul>
H27. 12. 10	第 5 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本書のとりまとめ方針について</li> <li>・ 本郷キャンパス内の残置石材等について</li> <li>・ 三四郎池散水設備改修工事（仮称）について</li> </ul>
H27. 12. 17	意見交換会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 育徳園の動植物およびその生育環境に関する当 WG での議論の妥当性を確認するため、理学系研究科生物学専攻生物学講座の塚谷裕一教授、寺島一郎教授、上島励准教授と意見交換</li> </ul>
H28. 1. 5	第 6 回 WG	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本書のとりまとめに向けた確認</li> </ul>
H28. 1. 8	植栽管理部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本書について報告</li> </ul>
H28. 1. 15	キャンパス計画室会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本書について報告、審議</li> </ul>

## 目次

1. 育徳園の管理指針策定に向けて	3
1-1 本書の趣旨と結論 [O]	3
1-2 基本的な図面 [S]	6
1-3 育徳園および園内の建造物の概要 [S]	7
[付記] 育徳園の名称－心字池と三四郎池について [K]	9
2. 育徳園の履歴	11
2-1 歴史的変遷 [H, T]	11
2-2 視点場と眺望景観の履歴 [H]	22
2-3 教育研究利用の履歴 [S]	28
3. 育徳園の価値とあり方	33
3-1 育徳園の価値 [O, T, H]	33
3-2 育徳園のあり方－管理指針策定に向けた論点－ [O, T]	36
4. 参考資料	43
4-1 年表 [H]	43
4-2 園内の動植物の概要 [T]	47
4-3 園内の水環境の概要 [O, H]	53
4-4 キャンパス計画上の位置づけ [O]	57
4-5 学生や教職員による利用状況 [T]	64
4-6 工事履歴 [S]	66
4-7 過去の図面 [S]	(省略)
4-8 過去の写真 [S]	(省略)

※題名脇の略号は執筆担当者を表す。前頁参照。



# 1. 育徳園の管理指針策定に向けて

## 1-1 本書の趣旨と結論 [0]

### 1) 目的

東京大学本郷キャンパスのほぼ中央に位置する育徳園は、加賀藩邸時代の空間骨格を未だ堅持しており、本キャンパスの歴史的価値を代表する空間のひとつである。同時に、圧倒的な量の緑を有し、多様な動植物の母胎となり、都心において極めて貴重な緑地空間でもある。一方で、多くの学科において教育活動の現場でもあり続けてきた。また「三四郎池」という愛称で知られるように、1908年に朝日新聞で連載された夏目漱石の『三四郎』で主人公が散策する舞台ともなるなど、本郷地区キャンパスの教職員や広くキャンパスを訪れる人々の活動・出来事を受け容れてきた場所でもある。このように、育徳園の有する価値は多様である。また、その歴史的な歩みの中でその価値の多様性が醸成されてきた側面もあろう。そのため、現在に至ってはその価値を一側面から語るだけでは甚だ不十分であると言わざるを得ない。

この育徳園を未来に向けてどのように残し、またどのように手を加えていくべきかを考えるとき、ある一定の方向性を見出し、そこを目掛けて管理の指針を立てることが必要となる。本書は、そのための一歩を踏もうとするものである。すなわち、育徳園の将来計画および維持管理方針の前提となる考え方を定めるために、育徳園の履歴を整理し、育徳園の有する価値について議論を行い、育徳園の在り方についてひとつの方向性を見出すこと、また管理指針を策定するために必要な論点を整理することを目的とする。

### 2) 対象

本書は以下の範囲を対象地とするが、主に育徳園の園地・園路・池などの庭園に係るエリアについて述べるもので、範囲内に含まれる建築物の価値を論ずるものではない。山上会館や弓道場などは育徳園に隣接ないし含まれるものではあるが、それらの建築的価値についてはここでは扱わず、別途調査が必要である。なお池の名称としては「心字池」を用いるが、引用する資料で「三四郎池」が用いられている場合はそのまま用いる。



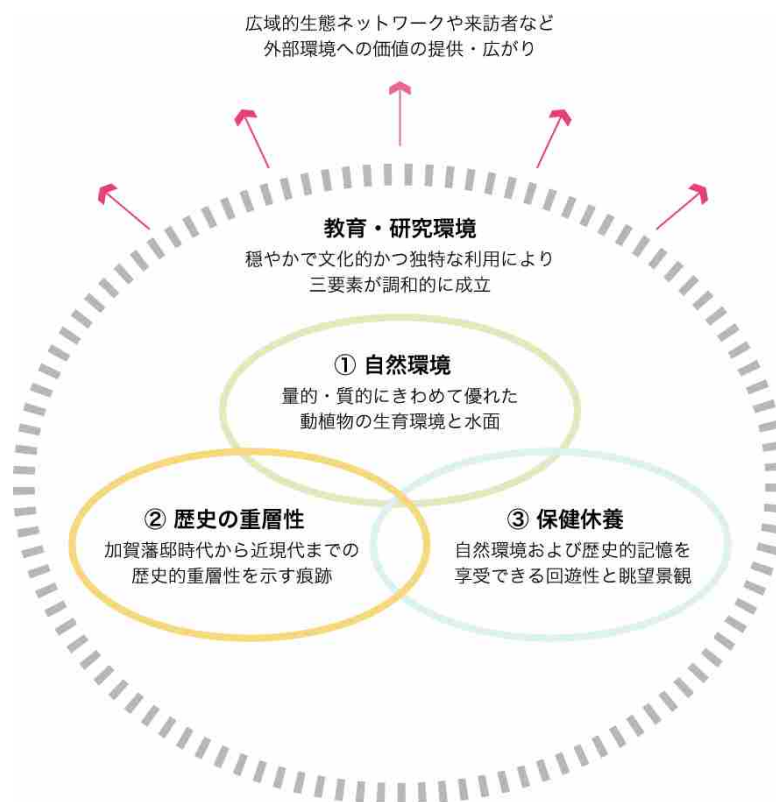
図 1-1 本書の対象地

### 3) 結論の要旨

本書の結論の要旨を以下に示す。

#### 【育徳園の価値】

育徳園の価値は、①自然環境、②歴史の重層性、③保健休養の3つの要素が調和的に共存してきた文化的な価値である。加賀藩邸時代に形成された日本庭園が、大学という教育・研究機関に取り込まれ、独特な利用をされてきたことによって、その価値を醸成してきた。



#### 【育徳園のあり方 ー管理指針策定に向けた論点ー】

今後の育徳園は、上記の価値を凍結的に保存するのではなく動的に保全していくべきである。そのための論点を以下に示す。

##### 1) 短期的に実施すべき事項

###### ① 園路の安全性の確保のための植生等の管理

- ・ 歩行者に対して危険性を有すると考えられる樹木の管理方法の検討
- ・ そのための必要最低限の植生調査

- ・ できる限り予算を抑え、かつ計画的・効果的な管理を行うための具体的な体制の検討
- ・ 園路自体の危険箇所の手当

#### ② 園内の安全性確保のための柔軟な運用

- ・ 台風（暴風）通過後と積雪後は、安全性が確認されるまでの間、入園を制限（一時的に立ち入り禁止）するなどの柔軟な利用規制

#### ③ 外来種の駆除および随時可能な植生管理の工夫

- ・ シュロやトウネズミモチといった外来種の駆除
- ・ 現在行われている植栽管理（落ち葉清掃など）の中で随時実施できる工夫の検討

#### ④ 保護すべき史跡の明確化および最低限必要な調査・保護措置

- ・ 緊急的に保護すべき史跡に対するミニマムな調査と最低限必要な保護措置

#### ⑤ 利用者への案内

- ・ 利用者の理解を助けるような工夫
- ・ HPでの情報公開など、すぐに取り組める方法から実施

### 2) 中長期的に実施すべき事項

#### ⑥ 持続的な環境管理システムの構築

- ・ 中長期的に展開しうる植生・水（質・量）や土壌など、総合的な環境管理システムの検討
- ・ 植生については、特に大木（の倒木）に対する維持管理方針の検討
- ・ 低木も含めた調査・データ整備
- ・ 不適切な植生の防止、またそのための管理部局等との連携
- ・ できる限り予算を抑え、かつ計画的・効果的な管理を行うための具体的な体制の検討

#### ⑦ 園路の再デザイン

- ・ 園路を、自然環境や歴史の重層性と調和するものとして再デザイン
- ・ 雨水による土壌浸食などを防ぐ園路デザイン（必要に応じて短期的措置も要検討）
- ・ 建築と自然環境が一体的に形成する空間への評価と適切な空間への誘導

#### ⑧ 視点場の再デザイン

- ・ 園路の再デザインと併せた、戦略的な視点場・眺望景観の再編集
- ・ 特に重要な視点場環境を良好なものへと再デザイン

#### ⑨ 眺望景観・史跡の顕在化措置

- ・ 重要な史跡的要素について、中長期的に自然環境に負荷をかけない範囲での顕在化措置
- ・ 重要な視点場からの眺望景観を維持するための植栽剪定

## 1-2 基本的な図面 [S]

現時点で最新となる測量図（平成 15 年測量）を示す。

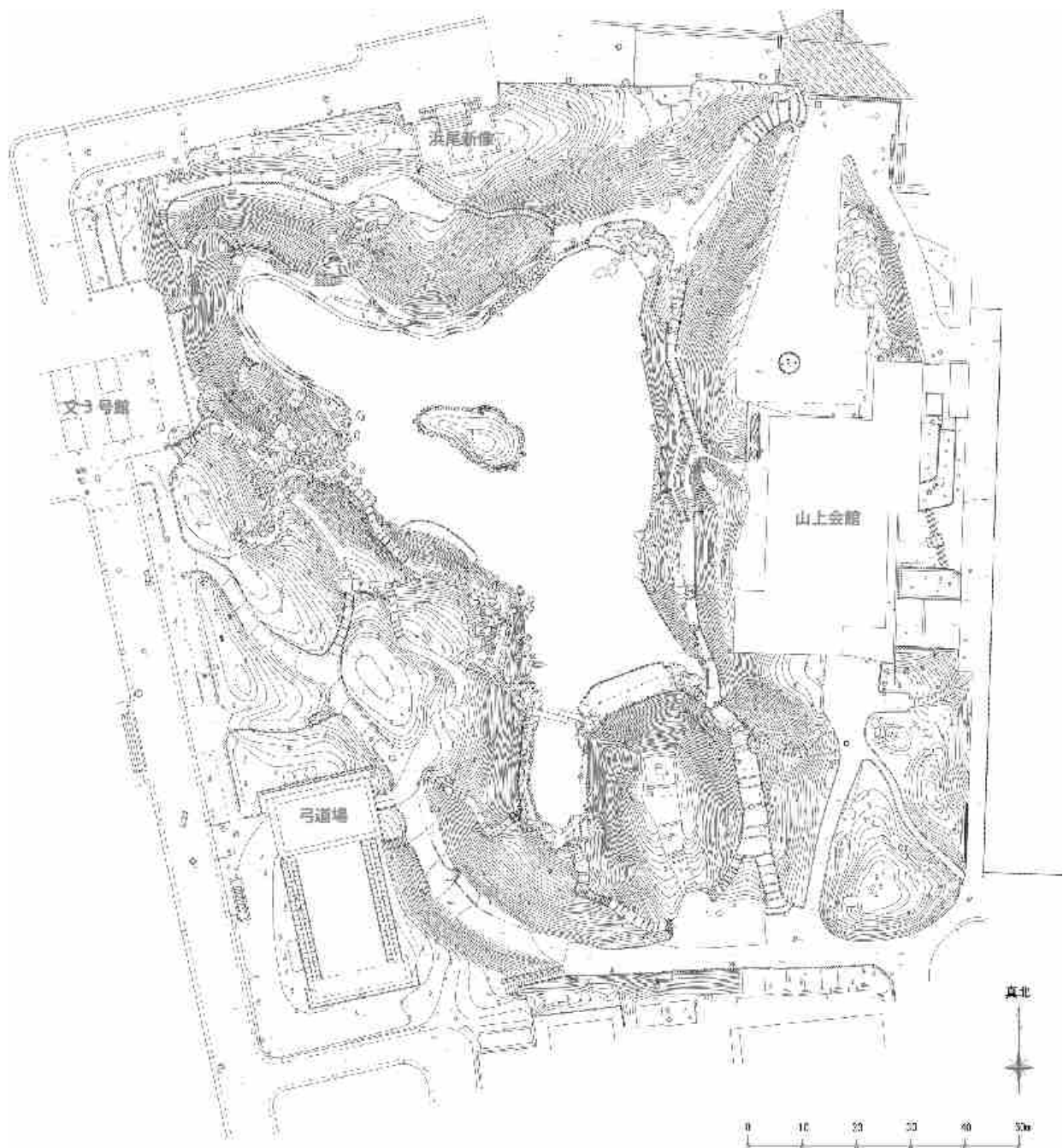


図 1-3 東京大学本郷キャンパス測量図（平成 15 年測量）

注) 育徳園の敷地範囲について明確に示した資料は存在しないが、本書では便宜上、キャンパス構内道路の縁から対象地内側の範囲を育徳園の敷地として整理した。



### 1-3 育徳園および園内の建造物の概要 [S, O, H]

#### 1) 育徳園の概要

##### 育徳園

造成・開設年代：寛永15年（1638年）

敷地面積：約24,000㎡（心字池 約3,600㎡）

形式：回遊式庭園



写真 1-1 育徳園内現況写真

## 2) 園内の建造物の概要

### 山上会館

竣工年：昭和61年（1986年）  
設計者：前川国男建築事務所  
施工者：清水建設（株）  
※創立百年記念事業後援資金により建設  
構造・階数：鉄骨鉄筋コンクリート造  
地上3階地下1階建  
建築面積：1,276.75㎡ 延べ面積：3,062.19㎡  
建物高さ：16.6m（現状GLより）



写真 1-2 山上会館エントランスとテラス

### 弓道場

竣工年：昭和10年（1935年）  
設計者：内田祥三（協力：土岐達人、成田春人）  
施工者：大倉土木（株）（躯体工事）  
構造・階数：鉄筋コンクリート造 地上2階地下1階建  
建築面積：126㎡ 延べ面積：126㎡  
建物高さ：6.37m（現状GLより）



写真 1-3 山上会館庭園

### 弓道場協倉庫

竣工年：昭和10年（1935年）  
設計者・施工者：不明  
構造・階数：鉄筋コンクリート造 地上1階建  
建築面積：7㎡ 延べ面積：7㎡  
建物高さ：2.8m（現状GLより）



写真 1-4 擬木橋から見た山上会館

### 銅像（濱尾新像）

制作時期：昭和7年（1932年）  
銅像作家：堀進二（1890-1978）  
人物：濱尾新（1849-1925）、帝国大学総長  
銅像サイズ：H271.5×W160.6×D240.0cm  
※参考資料：東京大学総合研究博物館『博士の肖像』  
図録（1998年発行）



写真 1-5 弓道場

### ポンプ跡

竣工年：昭和3年（1928年）  
設計者・施工者：不明  
用途：撒水用ポンプ

### 法文2号館南側擁壁階段

竣工年：昭和9年（1934年）  
設計者・施工者：不明



写真 1-6 ポンプ跡

## 【付記】 育徳園の名称一心字池と三四郎池について [K]

育徳園の池の正式名称は加賀藩邸時代と東京大学時代を通じて心字池だが、一般的には、池のみならず、庭園全体も三四郎池の名で呼ばれることが多い。もちろん、それは夏目漱石の小説『三四郎』に由来する。ただし、いつから三四郎池と呼ばれるようになったかは定かでない。確認されている中では、1946年8月の東京帝国大学新聞に初めて「三四郎池」という呼称が使われた。

『三四郎』は明治41年(1908)9月1日から12月末まで朝日新聞に連載され、翌年5月に春陽堂から単行本として出版された。漱石は4年にわたって教鞭をとった東京帝国大学を前年に退職し、朝日新聞社に勤めていた。小説の時間は新聞掲載時とほぼ同じように進行する。すなわち、当時は秋入学だったから、九州より上京したばかりの主人公小川三四郎の目に映った東京帝国大学の構内がかなり正確に描写されている。9月11日に学校は始まって教師が現れないため、いつまで経っても授業が始まらないことや(癩癩を起こした三四郎は池の周囲を2遍回って下宿に帰る)、正門のあたりから眺めた立派な校舎の様子、図書館内の深閑とした光景など興味は尽きない。

そして、育徳園はつぎのように登場する。1つ目は三四郎が美禰子に出会う場面であり、2つ目は三四郎が美禰子とよし子と3人で訪れる場面である。この小説にとって重要な舞台であった。

---

### 【シーン1】

“横に照りつける日を半分背中に受けて、三四郎は左の森の中へはいった。その森も同じ夕日を半分背中に受けている。黒ずんだ青い葉と葉のあいだは染めたように赤い。太い樺(けやき)の幹で日暮らしが鳴いている。三四郎は池のそばへ来てしゃがんだ。

非常に静かである。電車の音もしない。

三四郎がじっとして池の面(おもて)を見つめていると、大きな木が、幾本となく水の底に映って、そのまた底に青い空が見える。三四郎はこの時電車よりも、東京よりも、日本よりも、遠くかつはるかな心持ちがした。しかししばらくすると、その心持ちのうちに薄雲のような寂しさがいちめん広がってきた。そうして、野々宮君の穴倉にはいって、たった一人ですわっているかと思われるほどの寂寞(せきばく)を覚えた。熊本の高等学校にいる時分もこれより静かな竜田山(たつたやま)に上ったり、月見草ばかりはえている運動場に寝たりして、まったく世の中を忘れた気になったことは幾度となくある、けれどもこの孤独の感じは今ではじめて起こった。

ふと目を上げると、左手の丘の上に女が二人立っている。女のすぐ下が池で、向こう側が高い崖(がけ)の木立(こだち)で、その後がはでな赤煉瓦(あかれんが)のゴシック風の建築である。ただ額に少し皺(しわ)を寄せて、向こう岸からおいかぶさりそうに、高く池の面に枝を伸ばした古木の奥をながめていた。

二人は申し合わせたように用のない歩き方をして、坂を降りて来る。三四郎はやっぱり見ていた。

坂の下に石橋がある。渡らなければまっすぐに理科大学の方へ出る。渡れば水ぎわを伝ってこっちへ来る。二人は石橋を渡った。

「これはなんでしょう」と言って、仰向いた。頭の上には大きな椎(しい)の木が、日の目のもらないほど厚い葉を茂らして、丸い形に、水ぎわまで張り出していた。

「これは椎」と看護婦が言った。まるで子供に物を教えるようであった。

見ると野々宮君が石橋の向こうに長く立っている。

「君まだいたんですか」と言う。三四郎は答をするまえに、立ってのそのそ歩いて行った。石橋の上まで来て、

「ええ」と言った。なんとなくまが抜けている。けれども野々宮君は、少しも驚かない

「涼しいですか」と聞いた。三四郎はまた、

「ええ」と言った。

二人で坂を上がって、丘の上へ出た。野々宮君はさっき女の立っていたあたりでちょっととまって、向こうの青い木立のあいだから見える赤い建物と、崖(がけ)の高いわりに、水の落ちた池をいちめんに見渡して、

「ちょっといい景色(けしき)でしょう。あの建築(ビルジング)の角度(アングル)のところだけが

少し出ている。木のあいだから。ね。いいでしょう。君気がついていますか。あの建物はなかなかうまくできていますよ。工科もよくできてるがこのほうがうまいですね」

「それから、この木と水を感じ（エフフェクト）がね。一たいしたものじゃないが、なにしろ東京のまん中にあるんだから一静かでしょう。こういう所でないと学問をやるにはいけませんね。近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る。これが御殿（ごてん）」と歩きだしながら、左手（ゆんで）の建物をさしてみせる。”

## 【シーン2】

“三四郎はまた右へ折れて、爪先上（つまさきのぼ）りを丘のてっぺんまで来た。道はてっぺんで尽きている。大きな石がある。三四郎はその上へ腰をかけて、高い崖（がけ）の下にある池をながめた。下の運動会場でわあというおおぜいの声がする。

よし子は先へ上る。二人はまたついて行った。よし子は足を芝生のはしまで出して、振り向きながら、「絶壁ね」と大げさな言葉を使った。「サッフォーでも飛び込みそうな所じゃありませんか」

美禰子と三四郎は声を出して笑った。そのくせ三四郎はサッフォーがどんな所から飛び込んだかよくわからなかった。

「あなたも飛び込んでごらんなさい」と美禰子が言う。

「私？ 飛び込みましようか。でもあんまり水がきたないわね」と言いながら、こっちへ帰って来た。

三四郎はまた石に腰をかけた。女は立っている。秋の日は鏡のように濁った池の上に落ちた。中に小さな島がある。島にはただ二本の木がはえている。青い松（まつ）と薄い紅葉がぐあいよく枝をかわし合って、箱庭の趣がある。島を越して向こう側の突き当たりがこんもりとどす黒く光っている。女は丘の上からその暗い木陰（こかげ）を指さした。

「あの木を知っていらして」と言う。

「あれは椎（しい）」

女は笑い出した。

二人のいる所は高く池の中に突き出している。この丘とはまるで縁のない小山が一段低く、右側を走っている。大きな松と御殿の一角（ひとかど）と、運動会の幕の一部と、なだらかな芝生が見える。”

（夏目漱石（1908）『三四郎』より引用）

## 2. 育徳園の履歴

### 2-1 歴史的変遷 [H, T]

注：以下のうち「#」の記しをつけた節の記述は、2009年に刊行された「三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書」の歴史調査報告（執筆者：遠藤賢也、元・本学大学院新領域創成科学研究科）にもとづくものである。

#### 1) 江戸初期から幕末までの日本庭園としての時期（1617年頃～1867年）#

現在の本郷キャンパスに相当する敷地が加賀藩前田利常の所有となったのは1617年頃であり、大阪夏の陣の褒美として将軍より賜ったとされる（東京大学医学部百年史編集委員会，1967）。この敷地は暫く荒廃していたものの、寛永6年（1629年）の徳川秀忠・家光両公の相次ぐ訪問に先立って、大規模な殿舎の建築と庭園（後の育徳園）の整備がなされた（東京帝国大学庶務課，1940）。なお、この敷地が加賀藩の上屋敷となったのは1683年である。

当初の庭園の整備について、加賀松雲公（近藤，1909）によると、「御露地、泉水、築山などできし、富士見の亭、麻木亭、達磨亭、カラカサ亭、三角亭、鳩の亭などと名づけ、珍しかりける、御物ずきの御亭どもできし」とある。また毎年6月1日、将軍に献上するための氷を貯蔵する「氷室」も園内に築かれた。庭園作庭の過程にて築かれたサザエ山は螺旋状の登り道のある築山で、1883年に陸軍によって測量された5千分の1東京図によると、比高6m海抜約40mに及び、その頂上からは江戸湾や富士山を眺めることができたという。この築山は庭園の池を掘った際の土砂を積み上げて築かれたもので、加賀藩の本拠である金沢の兼六園のサザエ山を模したものとされる（西秋，2000）。園内には八景、八境の勝が配され、泉水・築山・小亭等数奇を極めたものであった。庭園の名前は5代藩主綱紀によって、育徳園と命名され、当時江戸諸侯邸の庭園中第一と言われた。亭や奇岩の配置された庭園は、静寂で鬱蒼とした木立に覆われていた模様であり、とりわけ育徳園の有する林園美が賞賛された（東京帝国大学庶務課，1940）

育徳園の現存する最も古い絵図は、当初の整備から60年ほど経った時期である1688年の「武州本郷邸図」である。中ノ島を配した泉水や栄螺山、富士山（後の名称は椿山であり、1964年に着工された経済学部校舎の建設によって消滅）といった、後の時代にも一貫してみられる空間構成要素がこの時期には完成していたことがうかがえる。正確な測量に基づいて作成された1840年～45年ごろの「江戸御上屋敷絵図」（図2-2）と比較すると、庭園が完成した江戸時代初期から末期までの約220年あまり、大きな空間構成の変化がみられなかったと考えられる。

江戸期の加賀藩上屋敷の中では、育徳園は主として、藩主が来客を接待する中心的な場として用いられており、庭園内を散策し、御亭で休憩し、その後馬場へ行くという一連のもてなしが行われていた（森下，1990）。育徳園を含む御殿空間と家臣等の生活する場所である詰人空間は区分され、1717年の参議公年表によれば、特に育徳園はその出入りに関する監視が厳しく、夜中でさえも見回りがあり、また板塀によって他と分けられていた（森下，1990）。

他方、加賀藩上屋敷全体からすれば、育徳園には火除け地としての役割も期待されていたと推測される。明暦・天和の大火など、江戸時代、約250年間に加賀藩邸は少なくとも6回は大規模な火災に見舞われている（森下，1990）。延焼防止、避難場所、消火用水として心字池の水が利用されていたと考えられる。

以上の江戸時代の状況をまとめると、育徳園の景観を構成する池泉や築山、御亭、氷室といった要素は、庭園作庭当初よりみられた。また育徳園は、藩主の接待の場として、あるいは火除け地として、特別な意味を付加された場所であった。

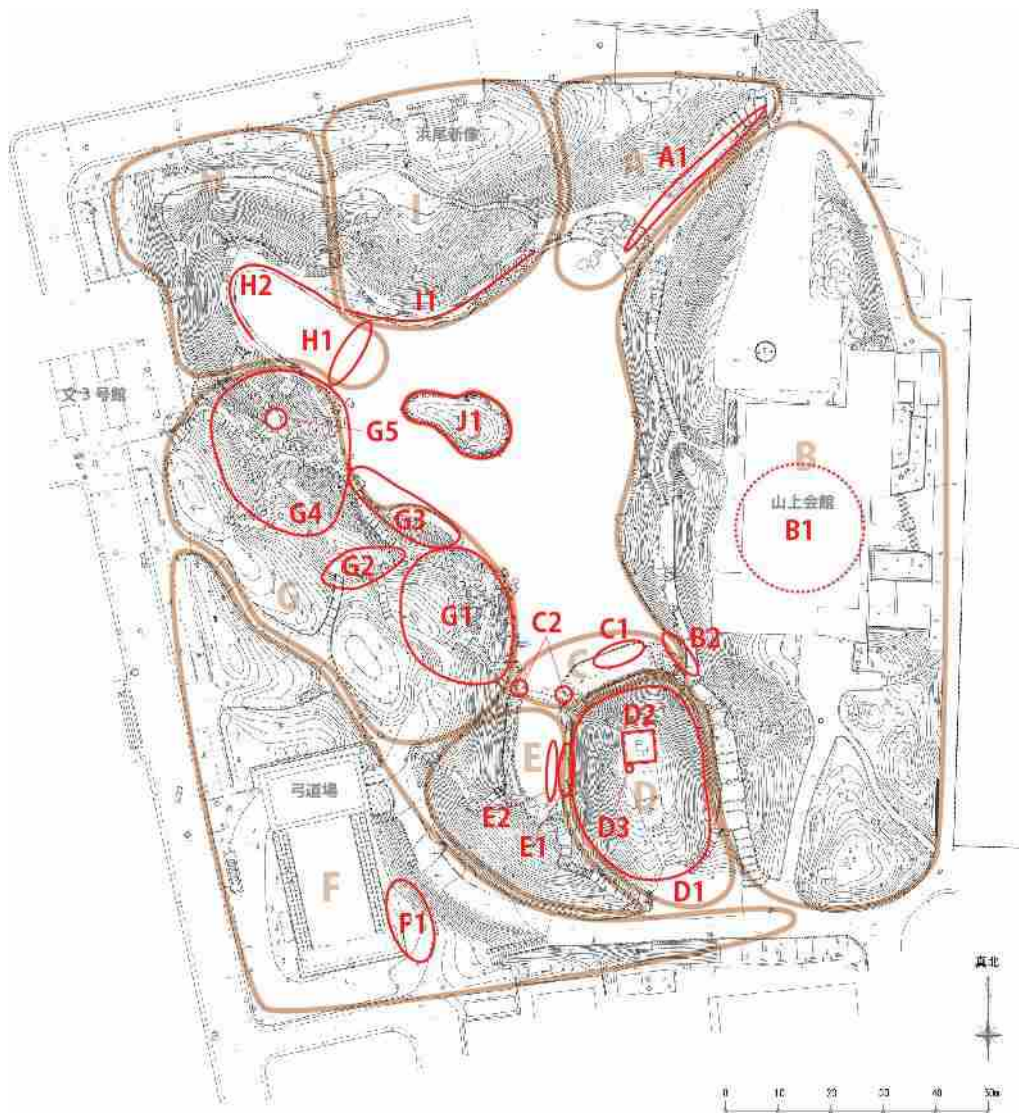


図 2-1 江戸時代の史跡・遺跡（園路については検討中）[H, O]

表 2-1 江戸時代の史跡・遺跡リスト（園路については検討中）[H]

区域	NO.	史跡	遺跡 (地下に残る可能性)	備考
A	1		池の排水	給排水を暗渠化？
B	1	築山		江戸時代以降～山上会議所、山上会館建設に伴う削平により縮小しているが、山上会館の庭園に利用。
	2		船着き	山上会館側の園路を設置する際、滝に見立てた青石を土留めにして船着き場を埋め立てた可能性。
C	1		藤棚部分	現在の藤棚部分は江戸時代より張り出しており、育徳園の護岸が埋立てられ遺跡として残っている可能性。
	2	擬木橋下の基礎と西側の橋挟石		
D	1	御傘亭の築山		元禄元（1688）年「武州本郷邸図」（（財）前田育徳会尊経閣文庫所蔵）では御傘亭の位置に薬学部から池に伸びる谷が描かれている。これ以降の絵図から谷が埋め立てられ御傘亭が描かれることから、御傘亭は築山と考えられる。土留めの柵、石垣設置などにより表面が削平されているが江戸時代の状態を残している。
	2	御傘亭の基礎		
	3	富山藩の記念碑		富山藩上屋敷から移転した石碑。

E	1	東側の巨石を使用した護岸		
	2		八つ橋（橋2）の杭	池が干上がった際に杭を確認。
F	1	築山の痕跡		
	1	巨石群 1		親不知子不知を表現？
	2	巨石群 2		寢覚ノ床を表現？庭園図では板状石材が互い違いに並ぶ。
	3		護岸の石材	張り出した護岸の北側に護岸の石材が見えている。護岸によって育徳園の護岸が埋め立てられている可能性がある。
	4	巨石群 3		育徳園の庭園図では巨石群 1 のような巨石が描かれる。育徳園の巨石群は滝に組み直された可能性。
	5	板状の巨石		年代不明。
H	1		橋 3 の基礎	池内に残っている可能性が大きい。
	2		護岸の杭	
I	1		護岸	
J	1		中島	江戸時代より大きくなっている。



図 2-2 江戸御上屋敷絵図(1840-1845 年)における三四郎の様子 金沢市立玉川図書館 近世史料館所蔵

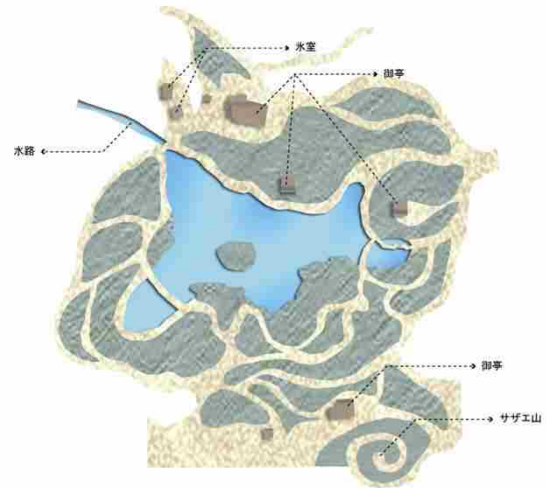


図 2-3 江戸御上屋敷絵図を元に作成した庭園の模式図



写真2-1 育徳園内の築山のモデルとなった金沢兼六園のサザエ山（筆者撮影）



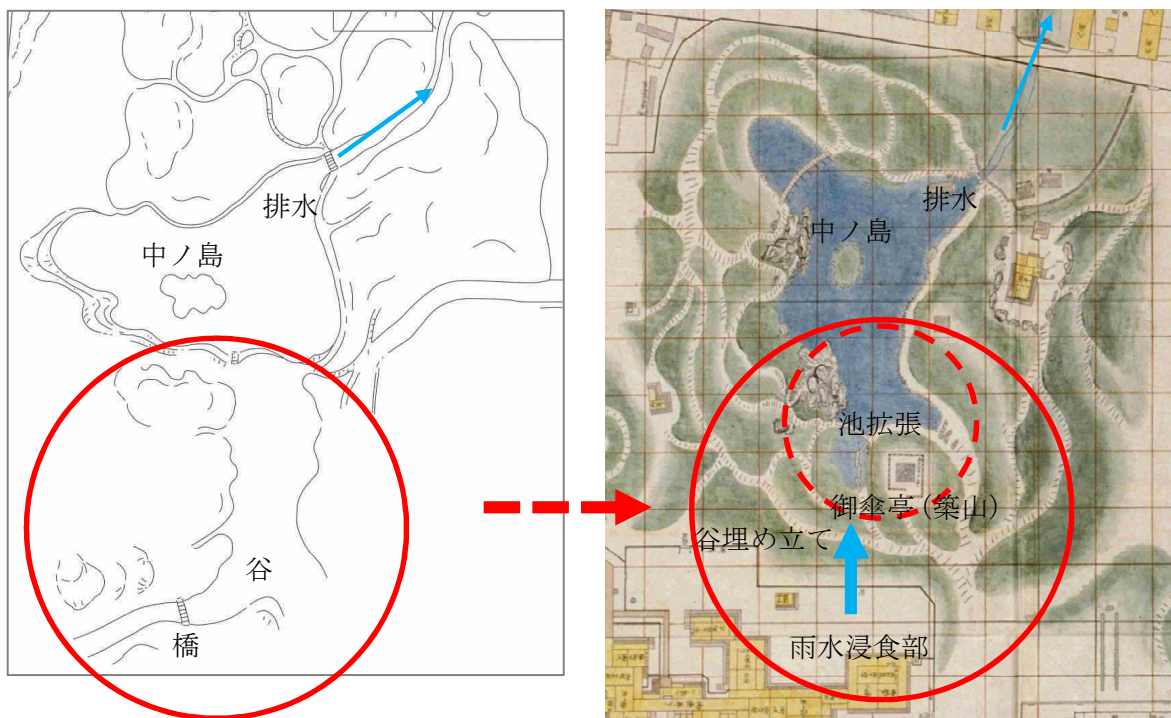
写真2-2 育徳園内のモデルとなった金沢兼六園の船型御亭（筆者撮影）

## 2) 心字池と周辺で行われた 1688 年以降の造成 [H]

1638 年、加賀藩 3 代藩主前田利常が本郷邸に園池を設け、1671 年、5 代藩主前田綱紀が育徳園を整備し、9 名の儒者を招き「詩讌」を開催、「八景八境の詩文」を詠んでいる。当時の絵図が存在しないため育徳園の前身がどのような庭園であったか不明であるが、1688 年の「武州本郷第図」とこれ以降の絵図から心字池の変遷を確認することができる。「武州本郷第図」とそれ以降の絵図を比較すると、池の摺鉢状地形、中ノ島、北東側の排水は共通するものの、池の南側に谷があり橋が架けられている。「武州本郷第図」の 24 年後にあたる 1702 年「御上屋敷惣絵図」では池は南側に拡張されている。また、谷が埋め立てられ「御傘亭」の基礎が描かれている。これ以降の絵図では池の形状に大きな変化はないことから、1688 年から 1702 年の間に行われた大規模造成以降、大きな形状変更はなく現在に至ると考えられる。

2015 年秋の豪雨で池の南側崖で雨水の流入を確認した (3-2 育徳園のあり方 ⑦園路の再デザイン参照)。表面の柵、枯葉の堆積が雨水で流されたことから崖部分の堆積を観察することができた。堆積土は黒色土を主体としロームブロックが少量含まれている。この部分で関東ローム層の自然堆積層を確認できなかった。遺跡調査による堆積状況の調査による確認が必要であるが、谷埋め立ての痕跡と考えてよいだろう。「御傘亭」の崖では柵の設置工事に伴う盛り土のため南側崖のような表土の観察はできなかった。「武州本郷第図」の谷は埋め立てられ現在に至るが、池南側の大学敷地の雨水が南側崖へ流入することから江戸時代の高低差が現在も残っていると考えられる。

なお、この頃の排水路は開渠であり、明治 16 年の等高線と水戸藩邸絵図を重ね合わせた図 2-5 に示すように弥生門の回りから水戸藩邸敷地を通して不忍池方面へ流していたと考えられる。埋蔵文化財調査室の行った工学部 3 号館の調査では心字池の排水路遺構が出土している。



「武州本郷第図」 1688 年

(公財) 前田育徳会尊経閣文庫所蔵より作成

「江戸御上屋敷惣絵図」 (1840~45 年頃)

金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵

図 2-4 心字池とその周辺で 1688 年以降に行われた造成 [H]



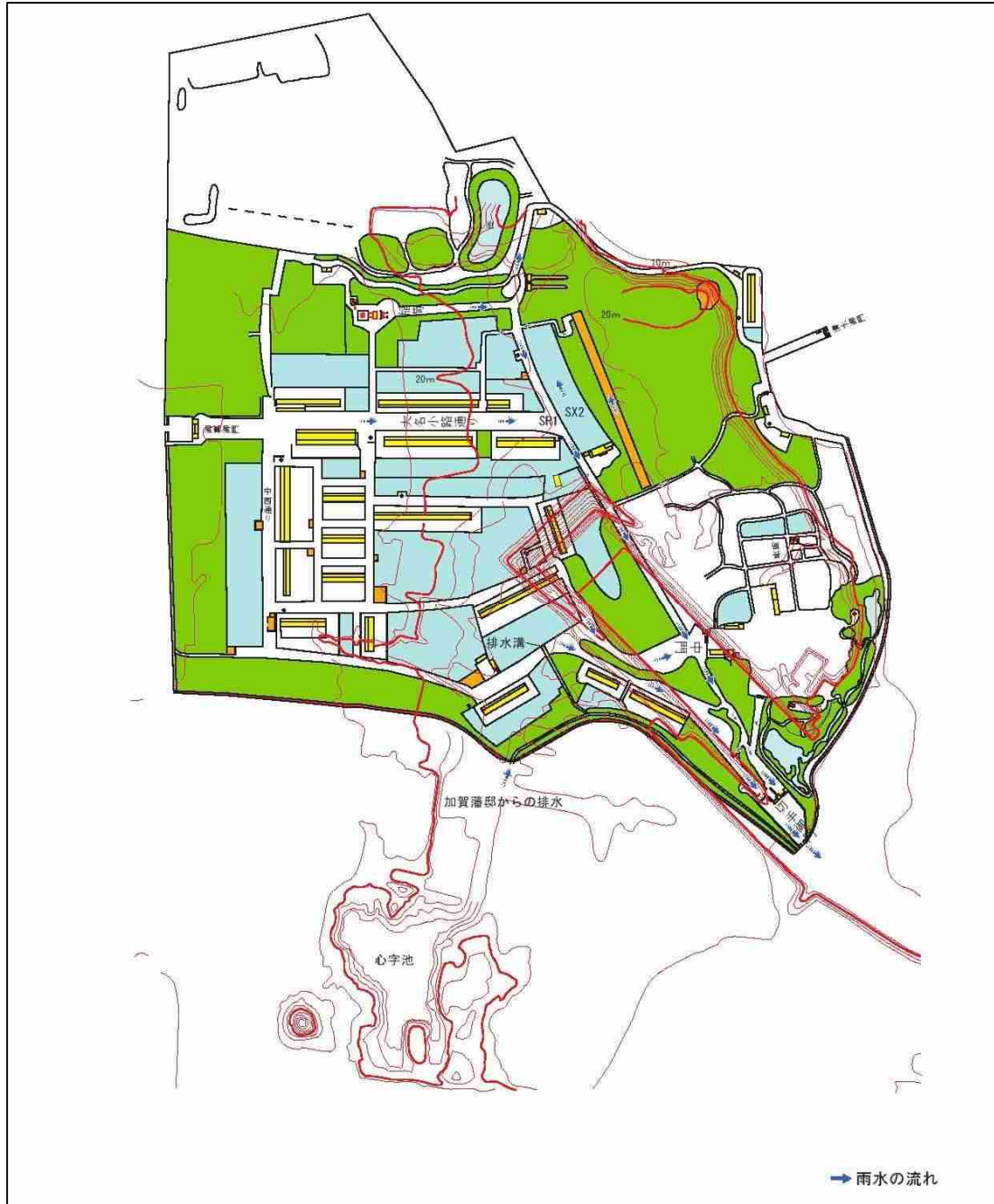


図 2-5 明治 16 年の地形等高線と水戸藩邸絵図の重ね合わせ図 [H]  
 (『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』(個人蔵)と建設省国土地理院所蔵、(財)日本地図センター複製 1984  
 「明治 16 年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士  
 町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分之一東京図測量原図』の等高線を重ねた。)

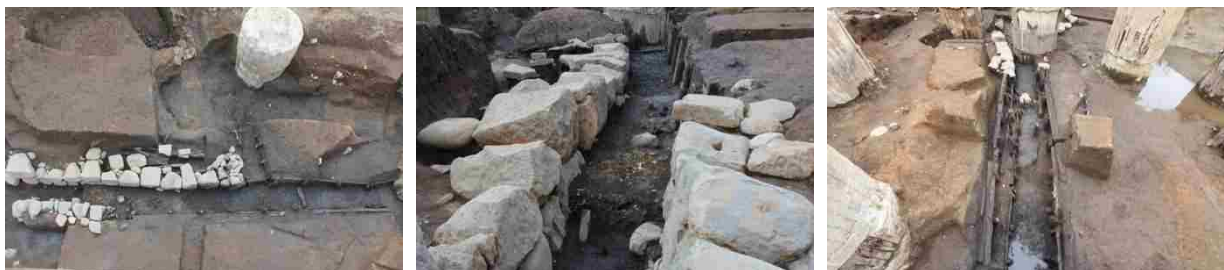


写真 2-3、2-4、2-5 工学部 3 号館で出土した心字池の排水路遺構

### 3) 明治維新から関東大震災にかけてのキャンパスとなった時期（1867年～1923年）#

1867年明治維新をむかえ、加賀藩の屋敷は官有地へと改められた。育徳園のある区域は1871年に文部省用地として接収された。その後、1876年に東京医学校が本郷の地に移転し、翌年には東京医学校と東京開成学校が合併し東京大学が誕生したが、このころに、残された育徳園の池と樹叢を大学構内に組み込むことが決まったとされる（東京大学百年史編集委員会，1984）。この時期の加賀藩上屋敷や育徳園の管理状況についてはほとんど資料が存在しないが、お雇い外国人による回顧録に当時の加賀藩邸に対する言説として「荒漠タル原野」という記述が残されていることから（東京大学百年史編集委員会，1984）、荒廃の進むままであったと考えられる。上述の1908年「三四郎」からも、キャンパス編入後の数十年ですでに鬱蒼とした樹林が成立していたことが伺える。

東京大学の敷地となってから、育徳園の周囲には、急速にさまざまな部局の校舎が建設されていった。1892年の時点ではキャンパス内のレンガ造の建物の総面積は2500坪に過ぎなかったが、その後の25年間で9300坪に増加した（東京大学百年史編集委員会，1984）。この時期、本郷キャンパスの中には、育徳園以外は未使用の空地をほとんど残さないほど建築物が増えたとされる。東京大学の医・法・文・理・工それぞれの部局の配置は、敷地のほぼ中央を占める旧加賀藩上屋敷及び育徳園の周辺に広がる。これらの配置は加賀藩時代の敷地の構造に強く則っていた（東京大学百年史編集委員会，1984）が、建築のスタイルは多様であった（岸田，1997）。

周囲の様相が変化するに伴い、育徳園もその空間の一部が徐々に侵食されていった。育徳園の東部・南部については、当初よりそれぞれ運動場と医学関連施設が隣接していた関係で変化はみられないが（図2-6参照）、西部・北部に関しては道路位置の変更、諸施設の拡充に伴い、育徳園内部まで変化が生じた。この時期の毎年のキャンパス図面を通して見ることのできる育徳園内部の変化として、大きく2つの点があげられる。

1つ目は、校舎の拡充の過程での、育徳園を構成していたサザエ山と水路の消失である。サザエ山は、育徳園の西側に位置し、江戸初期に築かれたものであるが、1897年からこの近傍に医科大学衛生学・生理学・医化学・薬物学の4教室3棟が着工され、その工事の過程でサザエ山は消滅した（東京大学百年史編集委員会，1984）。この区域は構内において地形的に建設に優位であったと指摘されており（岸田，1997）、これが消滅の原因となったと考えられる。また、育徳園から北東に向かって流れ出る水路についても、1890年代前半に消失したことがキャンパス図面から読みとれる。幅約1.8mある水路は空堀となり、サザエ山の築山を崩した土によって埋め立てられた（坂口，1990）。

2つ目は、大名庭園から東京大学という土地の役割の変更に伴う、氷室と御亭という庭園構成要素の消失である。育徳園の北東部に位置していた氷室は、キャンパス図面には当初から描かれていない。1907年の「風俗画報」によると、明治初期までこの氷室は存在しており、キャンパス編入後に撤去されたものとみられる。最後は、育徳園の周囲に配された御亭である。また、江戸初期から後期にかけて幾度と築かれた（森下，1990）御亭は、その多くの部分がこの時期に姿を消しており、現在ではカラカサ御亭の礎石を残すのみである。氷室は氷を将軍へ献上用するための施設であり、御亭は客人の接待のために使われていたという用途を考慮すると、大学キャンパスになることで結果的に不必要な施設となり、消失したと考えられる。

以上のことから、明治時代初期から大正時代にかけて、キャンパス整備が急速に進む中で、育徳園の空間は、江戸時代に比べて大きく改変されていったことが分かった。その理由として、キャンパス内の校舎の拡充と、大名庭園としての役割の消失の2点が考えられた。

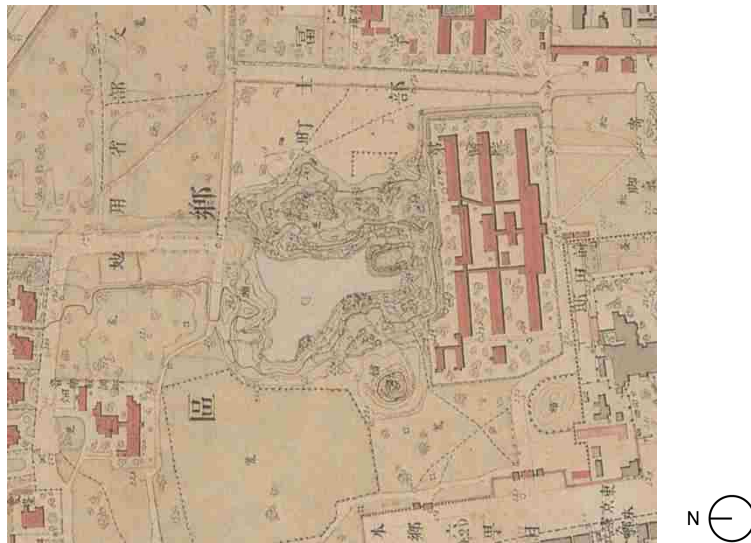


図2-6 参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図」(1883年)より  
本郷キャンパスの位置するエリアを抽出

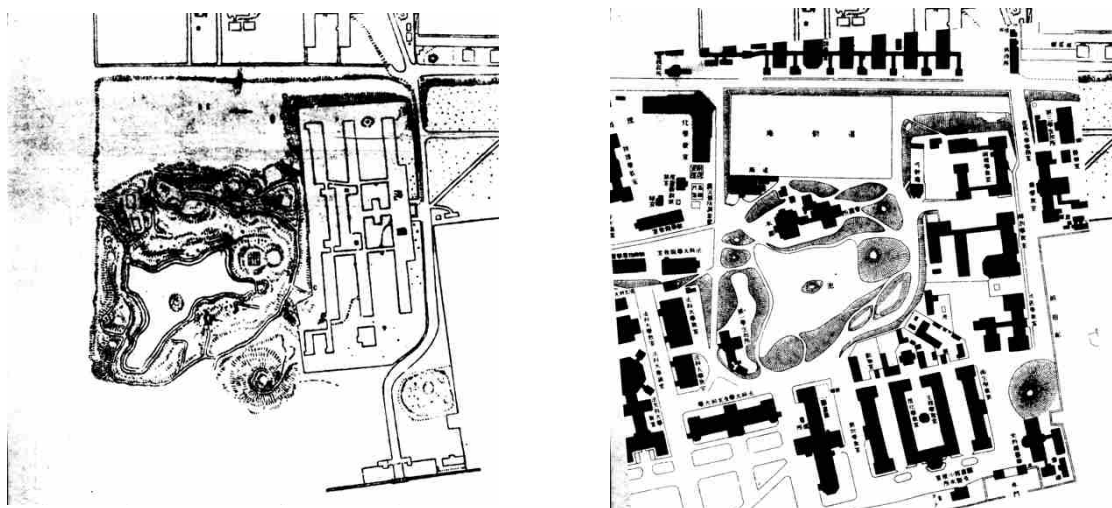


図2-7 1880年(左)、1917年(右)キャンパス図面 中央に位置するのが育徳園  
東京大学施設部保存の「施設配置図」を引用



写真2-6、2-7 第2期における育徳園の風景(1909年、1911年)  
医学生とその時代：東京大学医学部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み(2008)を引用

#### 4) 関東大震災復興から高度経済成長期に至るまでのキャンパス計画萌芽期 (1923年～1974年) #

1923年に関東大震災が発生し、本郷キャンパスや育徳園に甚大な被害をもたらした。関東大震災の時点で、本郷キャンパスは既に校舎によって狭隘な状態であった(東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会, 1988)。赤門脇の医化学教室より出火した火は、育徳園を取り囲む建物を順じ焼き尽くし、育徳園脇の山上を舐めつくすように拡大していったと伝わっている(東京大学百年史編集委員会, 1984)。当時の被害建物を示した図 2-8 より、育徳園を囲んでいた建物は、多くが延焼もしくは倒壊したことが伺える。1923年の「東京帝国大学構内及び附属航空研究所火災報告」によれば、火災は運動場、樹木池等に遮られるように止まった。また、1937年の「本郷区史」によれば、育徳園の池水は消火用の水に利用された。これらのことから、育徳園の心字池と樹林帯は、関東大震災において、延焼防止、学生・教職員や近隣住民の避難場所、消火用水として機能したと推測される。

震災を機に、キャンパスの復興計画が検討された。この計画の指揮を執ったのは当時の営繕課長を務めていた内田祥三(後の東京帝国大学第14代総長)であった。復興の基本方針は、災害を最小限とするために建物の周りに広い空地を作ること、そして建築物のデザインを統一し、諸施設の配置を秩序立てることであった(東京帝国大学, 1932)。この計画における育徳園の位置づけに関して、公式な文書は残されていないが、育徳園の周囲には広幅員の道路を計画し、堅固な縁取りを行っている(図 2-9)ことから、震災以前のような諸施設の建て増しによって、さまざまな防災上の機能を有する育徳園の内部にこれ以上の改変が及ぶのを避けることを意図したと考えられる。このように、この時期は、本郷キャンパス復興計画を策定する中において、育徳園の防災上の意義が評価され、できるかぎり改変せずに保全していくという考え方が初めて登場した時期であると考えられる。実際に、震災復興以降のキャンパス図面を通してみると、育徳園の空間範囲はほとんど変わらないことが分かる。

一方で、育徳園の内部にはいくつかの変化があった。この時期の一部改修を担ったのが、当時農学部講師の田村剛であった。整備計画に関する資料は残されていないが、「岩を急斜面から落として、着地した場所をその位置とする」という逸話が語り継がれている。田村は、その著書「実用主義の庭園」(1919年)において、庭園・公園の実用性・公共性という概念を提唱している。それゆえ、この育徳園の一部改修においても、学生・教職員の利用を見据えた改修が行われたものと推察される。1930年の「東京帝国大学附属図書館復興帖」のうち「大正十二年より昭和四年に亙る復興帖報告及圖面」に「庭園には四阿、花壇、噴水、溪流を配し、緑滴る木立も少なくない」という記述があることから、震災の前後にいくつかの改修整備が行われたと推測される。また、育徳園にアズマネザサやツツジなどの植栽もこの時期に行われたと推測される。人々の利用の観点からしても、震災後の時期の東京帝国大学新聞に学生が池で泳ぐ様子やアイススケートを楽しむ記事が紹介されており(写真 2-11)、すでに学生・教職員・近隣住民の憩いの場として機能していたものと考えられる。

以上より、本郷キャンパスにおける育徳園の積極的な役割として、特に防災と保健休養の2点がこの時期に強く認識されるようになったと考えられる。これは江戸時代に加賀藩上屋敷という観点から期待されていた役割と類似したものが、大学キャンパスという観点から主体を変えて再認識されたとも考えられる。

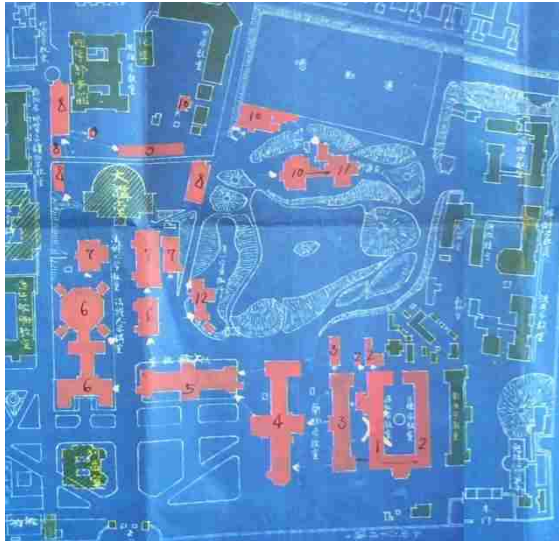


図 2-8 震災により倒壊・全焼した建物の配置  
(数字は延焼の順番を示す)

東京帝国大学構内及び附属航空研究所火災報告  
(1923 年) より引用



図 2-9 東京帝国大学復旧計画案  
(ピンクで示したのが育徳園を囲む街路)

東京帝国大学復旧計画書其 2 (1923 年) より  
引用・一部改変



写真 2-8、2-9、2-10 震災直後の育徳園内の様子  
東京帝国大学附属図書館復興帖 (1930 年) より引用

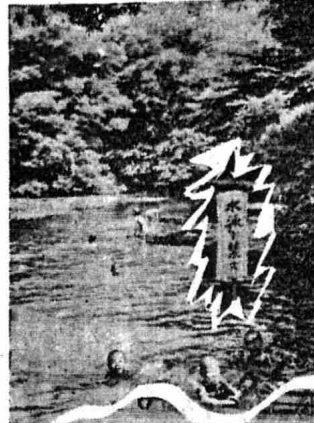
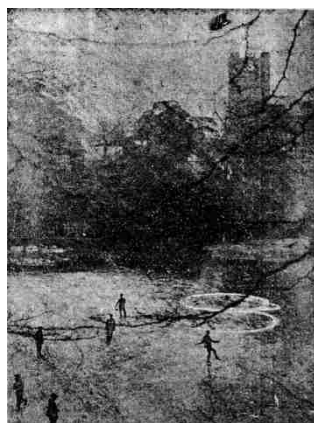


写真 2-11 心字池においてアイススケート・水泳をする学生の記事  
東京帝国大学新聞 (1928 年、1946 年) より引用

## 5) 高度経済成長期から現在に至るまでの時期（1974年～）#

高度経済成長を経た1970年代になると、既に震災からの復興を契機としたキャンパス計画から半世紀がたち、その影響力が弱まっていた（東京大学百年史編集委員会，1984）。本郷キャンパスは校舎が既に飽和状態にあり、騒音や排気ガスも問題となっていた。こうしたなか、1974年にキャンパス内の土地利用に関する計画が初めて発表された（図2-10）。この記録は1975年の「東京大学学内広報282」に残っている。こうしたキャンパス全体の土地利用計画がなされたのは、全国的にもかなり早いものであった。

この1974年の土地利用計画では、本郷キャンパス全体を“緑地”“保存”“再開発”“整備”の4地区に区分けし、建設行為の規制・誘導を図り、将来的な本郷キャンパスの有効且つ適切な土地利用を図ることが目的とされた。育徳園は、この中の“緑地”地区の指定を受けた。この計画における緑地の定義は以下の通りである。「一団の植樹された地域、又は運動場等の空地で、健全な戸外生活のように供され、かつ大学の教育研究活動にふさわしい物的環境を保つために、公共空地として維持する必要がある地区をいう。緑地に相応しい施設以外は原則として建設行為を認めない。」

この1974年の緑地という位置づけは、震災からの復興の中で登場した「改変せず保全する」という育徳園の位置づけが継承され、さらに「健全な戸外生活」や「大学の教育研究活動にふさわしい物的環境」という表現にあるように、より学生教職員にとっての役割を明確にしたものと考えられることができる。そして、この考え方は2011年の本郷キャンパス計画要綱や、2014年の東京大学キャンパス計画大綱まで概ね継承されてきたと考えられることから（詳細は4-4 キャンパス計画における位置づけ参照）、現在の育徳園のキャンパス計画上の位置づけの契機は、90年ほど前の関東大震災とその後の内田祥三らによる計画にあるといえよう。



図2-10 東京大学本郷キャンパス内の土地利用計画（緑色が緑地地区）

学内広報282（1975年）より引用・一部改変。

## 6) 参考文献

- 岸田省吾(1997) 東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究、東京大学学位論文。
- 近藤磐雄(1909) 加賀松雲公上巻, 羽野知顕。
- 阪口豊(1990) 東京大学の土台—本郷キャンパスの地形と地質—、東京大学史紀要、8、1-33。
- 東京大学医学部百年史編集委員会(1967) 東京大学医学部百年史、東京大学出版会。
- 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会(1988): 『東京大学本郷キャンパスの百年』、東京大学総合研究資料館。
- 東京大学百年史編集委員会(1984) 『東京大學百年史通史 2』、東京大学出版会。
- 東京帝國大學(1932) 『東京帝國大學五十年史 下巻』、東京帝國大學。
- 東京帝國大學庶務課(1940) 附 赤門と育徳園、『懷徳館の由来』、東京帝国大学。
- 西秋良宏(2000) 加賀殿再訪、『東京大学本郷キャンパスの遺跡』、東京大学総合研究博物館。
- 森下徹(1990) 第1章3節「育徳園」、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』、東京大学埋蔵文化財調査室。

## 2-2 視点場と眺望景観の履歴 [H]

育徳園に関する加賀藩本郷邸の文献史料、絵図は豊富に残されている。育徳園研究にとっては第一級史料であるが育徳園について大名庭園研究の立場から検討された例は少ない。育徳園の庭園図を見ると池を眺める庭園であった事が分かる。江戸時代以降、この回遊式庭園をベースに明治時代、大正時代、昭和時代までそれぞれの時代において整備が行われてきた。例えば、江戸時代の視点場を引き継いで設計されたと考えられる山上会館、新たな視点場として設定された文学部3号館の図書館、同道路のテラスなどである。視点場の中には御傘亭のように江戸時代から現在まで機能している視点場もある。しかし、江戸時代は視点場間を趣向を凝らして結んだと考えられるものの、現在は時代の異なる視点場が点在、園路で結ばれているに過ぎず文脈性に乏しい。また近年の樹林化により池を眺める場所も限られる。

ここでは育徳園の基盤となる回遊式庭園における視点場・眺望景観を調査し、また明治時代以降の変容を整理することで、育徳園の変容経緯とその意味について考察を行う。なお、本節の記述の出典は、東京大学埋蔵文化財調査室(1990)の『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法文4号館・文学部3号館建設地遺跡』『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点第1分冊』『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点第3分冊 考察編』および中島穰・中井祐・内藤廣(2010)「東京大学本郷キャンパス 育徳園の変遷とその要因」景観・研究講演論集 No.6 pp116-119 によっている。

### 1) 江戸期の視点場と眺望景観

加賀藩本郷邸の史料の中に育徳園の魅力伝える育徳園の「八景八境の詩文」がある。寛文11(1671)年、加賀藩5代藩主 前田綱紀は整備を行った育徳園に林鶯峰(林家2代)、林鳳岡(林家3代)、林春東、人見友元(竹洞)、野間三竹、野間允迪、平巖仙桂、澤田宗堅、源(五十川)剛伯、木下順庵(別資料では欠席とある)、9名の儒者を招き「詩讌」を開催したとされる。園内散策後、参加者は「八景八境の詩文」を詠んでいる。以下に題を示す。

育徳園八景：長林晨暉・清池宿禽・溪橋聞鶉・平蕪遊鹿・西塢花雲・竹逕涼雨  
恠巖紅楓・蟠松晴雪

育徳園八境：鳶旋店・月到亭・半曲榭・通達窓・標柱石・青顧軒・望富觀・晞驥堂

育徳園八景・八境の題、漢詩を検討すると詩の中には場所、施設、方角、季節、時間、天気、天体、動物、植物の情報が詠み込まれている。表2-2に分析結果を示す。

これより、育徳園八景・八境から園内には四季折々の見所があった事が分かる。現在、園内は樹林化し江戸時代の育徳園八景・八境を想像することはできない。しかし、視点場の一つ「傘御亭」跡には江戸時代の基礎が残っている。



表 2-2 育徳園八景・八境の分析 (題を分析したもの、漢詩部分分析中) [H]

育徳園八景

項目	場所	施設	方角	季節	時間	天気	天体	動物	植物
長林晨暉	西側		東方向を望む		朝	晴れ	朝日		林
清池宿禽	池							禽	
溪橋聞鶉	橋 (橋 1・橋 2)	橋		春?				鶉	
平蕪遊鹿	野原							鹿	雑草
西塙花雲	西側	築山?	西			雲			花
竹逕涼雨						雨			竹
恠巖紅楓		怪岩		秋					楓
蟠松晴雪				冬		晴雪			松

育徳園八境

項目	場所	施設	方角	季節	時間	天気	天体	動物	植物
鳶旋店		建築物							鳶
月到亭	育徳園の西側?	建築物	月が至る、西				月		
半曲榭		建築物							
通達窓		建築物部分							
標柱石		石							
青顧軒		建築物							
望富観									
晞驥堂		建築物							



図 2-11 「江戸御上屋敷絵図」1840-1845 年 (金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)

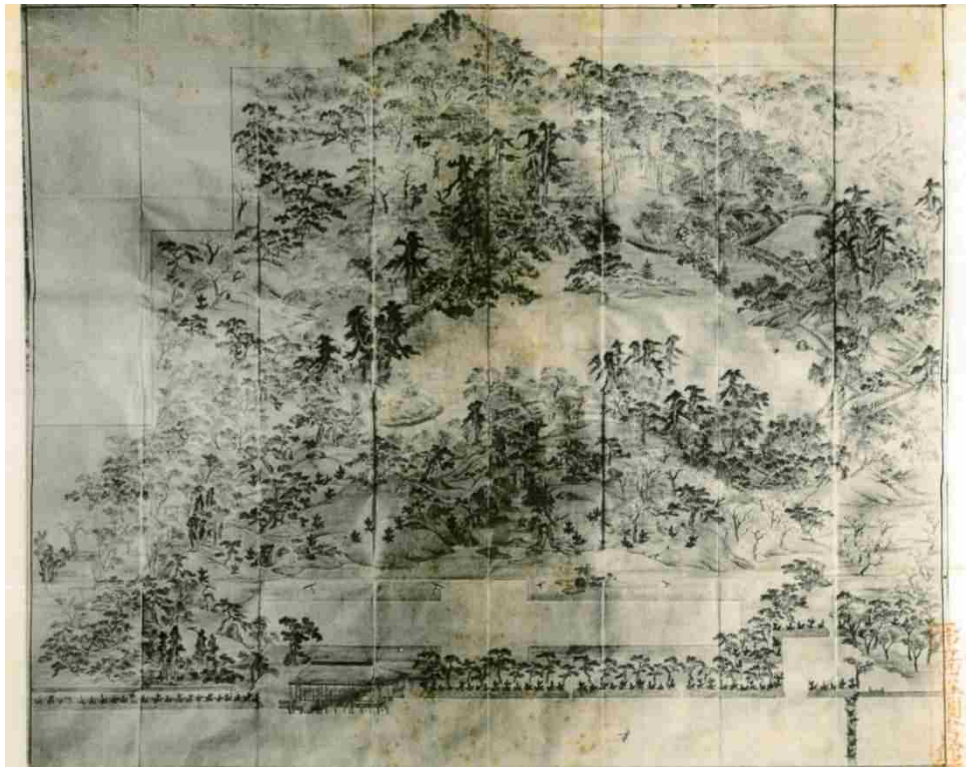


図 2-12 「育徳園」(京都市役所 1929「前田氏本郷邸園池 前田侯爵家所蔵文書」『京都市史稿』 pp235-255 掲載)

## 2) 視点場と眺望景観の整理

江戸時代から現在までの視点場について、上述の「三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書」におけるゾーニング A～I ごとに整理をする。GはG1、G2に分けた。また、江戸時代には池の北東に「御舟小屋」、南東に舟着きを確認できることから舟遊びが行われたと考えられるため、Jとして池水面を新たに追加した。図 2-13 に視点場、表 2-3 に視点場の江戸時代から現在までの変遷と景観を示した。ただし、明治時代以降の写真、施設の設置年代については、一部「財団法人日本地図センター発行、国土交通省国土地理院所蔵 2011『参謀本部陸軍測量局五千分一東京図測量原図』」を使用しているが、検討中である。AからJの視点場について記す。

### A 入り口

加賀藩の絵図によれば現在の育徳園の入り口に排水溝と橋が描かれ、現在の進入路には塀が設置され、池と東側敷地が区画されている。江戸時代は橋が設置されていることから視点場の一つであったと考えられる。入り口は夏目漱石の『三四郎』の中で印象的な場面として描かれており、現在の育徳園にとって重要な導入部分であり視点場である。池の飛び石は新たに設置されたもので、適正水位であれば飛び石に座ると水面にいるかのような錯覚を覚える。「写真集東京大学」(昭和 35 年(1990 年) 東京大学出版)の「育徳園 池滝」に見られる滝を眺めることができたが中島の樹木と滝周辺の樹木によってこの景観が遮られている。

### B 山上会館・山上会館テラス

「育徳園」、「育徳園図」は現在のグランド側から見た鳥瞰図で園内の名所、池、中島、橋、御傘亭、巨石群 1～3、サザイ山などが描かれている。この庭園にとって一番の視点場であったと考えられる。育徳園の施設は失われているが江戸時代からの視点場を引き継ぎ現在に至る。明治時

代に建設された山上会議所は東京大学の迎賓館でもあった。築山の上に富山藩上屋敷の書院を移築し、北側にガラス窓の二階建ての建物が建設されている（写真「東京帝國大學内の池」）。江戸時代の施設は撤去されているが、池、中島、御傘亭の築山、巨石群 1～3、サザイ山、育徳園の名所と新たに作られた滝（年代確認）など迎賓館の庭園にふさわしい眺望景観があった。

山上会館は山上会議所を撤去し築山を掘削して建設された地下 1 階、地上 2 階の建築である。1 階談話ホールとテラスは、池、中島、御傘亭の築山、巨石群 1～3、滝（明治時代以降）を借景としてもしくは直接眺めるための視点場となっている。つまり、山上会館は庭園図「育徳園」、「育徳園図」の眺望景観を継承した設計となっている。園内の視点場としては、現在唯一車椅子が入れる視点場でもあるが、現在の山上会館からの眺望景観は築山と池の東側の樹木によって当初の景観は失われている。

なお、地下 1 階の御殿食堂の庭園の月山に植えられたサツキは、来客をもてなすためのものであったが、現在は日照不足のため、サツキは咲かずに枯れ、シャガの群生が広がり、来客をもてなす庭とはなっていない。

#### C 藤棚と擬木橋

橋 1 は擬木橋に架け替えられている。西側の巨石群 1、東側の築山、中央の池と中島を眺望できる視点場である。

#### D 御傘亭

御傘亭は、自然地形ではなく築山と考えられる。その山頂に建設された御傘亭の上部施設は失われているが、基礎が残っており、江戸時代の視点場を引き継ぎ現在に至る。「育徳園」、「育徳園図」、絵図から、池、中島、橋、巨石群 1、東側の築山を眺めることができたと考えられる。池、中島、巨石群 1、東側の築山は残っているが、築山の樹木がこれらの景観を遮っている。御傘亭の基礎の上部に藤棚が設置されているが、日照不足によりフジの生育は止まっており、視点場空間としての魅力を削いでいる。

#### E 南西の池尻

江戸時代に園路があったかは不明。庭園図に八つ橋が描かれている。

#### F 弓道場を含む区域

江戸時代の状況は明確でないが、園路から池を見下ろすことができる。育徳堂（弓道場）は育徳園の池の景観の一つになっている。

#### G 巨石群 1・2、滝

石段と巨石群 1・2 は庭園図に描かれている。育徳園の池の中で最も江戸時代の状況を残している部分である。石段と巨石群 1 は「親不知子不知」、巨石群 2 は木曾川の「寢覚ノ床」に見立てている可能性がある。どちらも加賀藩の参勤交代のコースにあり大名庭園では参勤交代の名称を取り入れている例がある。

滝は明治時代以降（年代調査）につくられた。上段と下段に分かれ、上段は深山幽谷を表現した流れと園路、下段の 5 段（+1 段）の滝からなる。「写真集東京大学」（昭和 35 年（1990 年）東京大学出版）の「育徳園 池滝」によれば、滝と上段の園路は対岸から眺めることができた。上段の園路から池と中島を見下ろすことができ、下段の滝壺の飛び石から滝、中島、池を眺めることができた。近代に手を加えた育徳園の池にとって最大の見どころで近代庭園の滝として評価できるが、現在滝の前に行かない限り滝を見ることができない。

#### H 文学部3号館テラス、文学部図書館

文学部3号館テラス、文学部図書館の視点場は新たに作られた視点場であり、池と中島を視対象としたと考えられる。現在、テラスの半分が喫煙所などで占められ視点場として機能しておらず、また樹木によって視線も通らない。同様に文学部図書館からの景観も樹木によって遮られている。車椅子が入ることのできる視点場である。

#### I 園路

園路の位置は江戸時代のままで、巨石群1・3、東側の築山、正面の池、中島、傘亭を眺望出来た。

#### J 池水面

池の北東に「御舟小屋」があり舟で園内の景観を楽しむことができた。C東側は船着き。

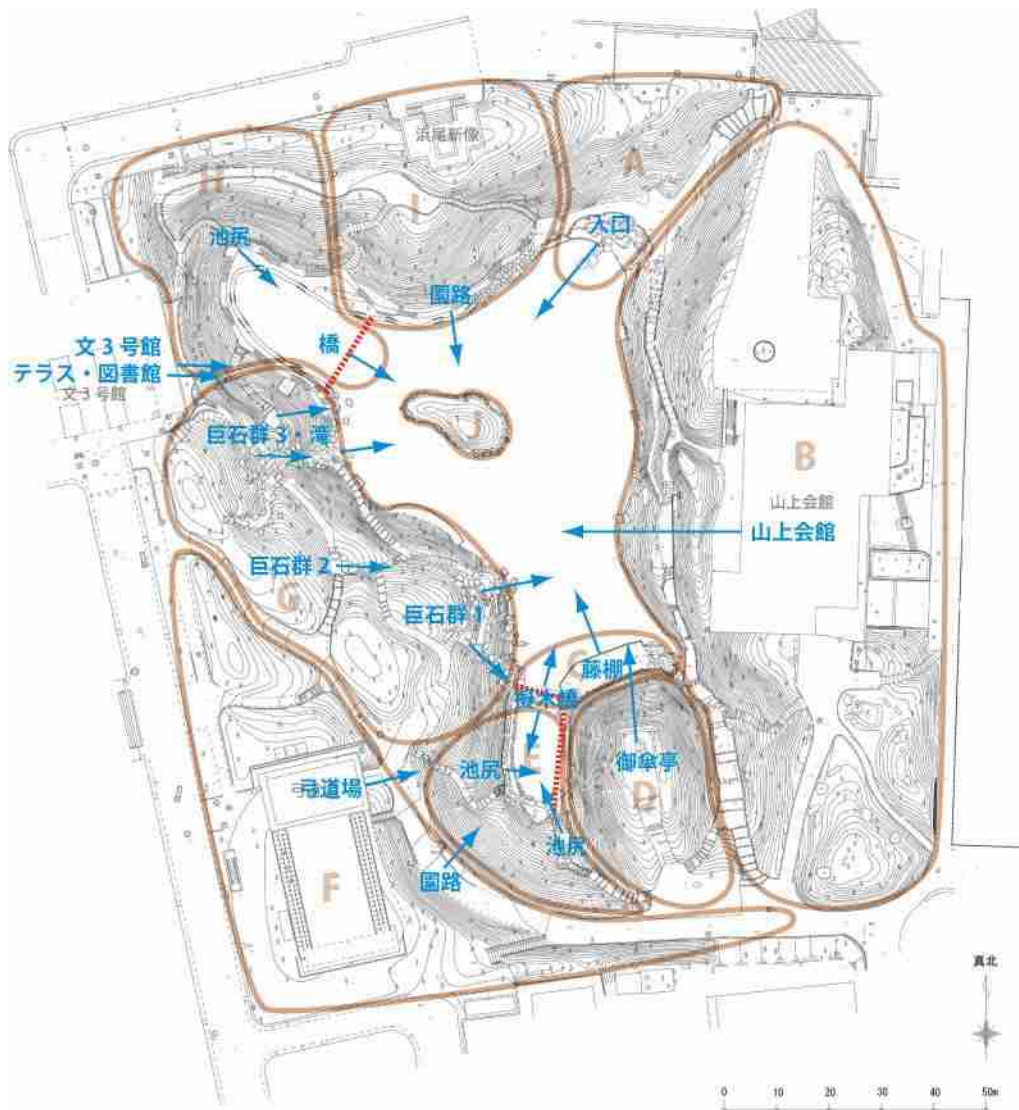


図 2-13 江戸時代から現在の視点場と景観 [H, O]

区域	視点場	主な借景対象	対象区域	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和	現在	備考	
A	1 石橋(橋4)～飛び石	池、中島	A・B・C・D?・E?・G・I・J	○	○	○	○ 滝が加わる	△	育徳園の池排水の暗渠化、石橋(橋4)の撤去、池飛び石の配置年代調査中、池飛び石の配置によって視点が池側へ	
	2 山上会館	池、中島、傘御亭、橋1・2?・3、巨石群1・2・3	A・C・D・E?・F・G・H・I・J	○					『育徳園図』(史料番号110907)、『育徳園 加賀松雲公上巻』(京京市史稿pp222-223)	
B	3 山上会館1F 談話ホールベランダ	池、中島、傘御亭跡、巨石群1・2?・3	A・C・D・E?・F・G・H・I・J		○?	○?	○?		山上会館所の建設年代確認	
	4 山上会館2F 御殿食堂	池、中島、藤棚、巨石群1、滝	B・C・F?・G・H				○	△		
5	園路(入からGまで)	池、中島、滝、藤棚、巨石群1、東築山	A・B・C・D・G・H・I・J				○	○	江戸時代の築山を掘削成形	
	1 現藤棚	池、中島、巨石群1、橋2、傘御亭崖、東築山	A?・B・D・C・G・H・I	○	○	○	?	△	現在のB園路の年代確認	
C	園路(藤棚以前)	池、中島、巨石群1、八つ橋、傘御亭崖、巨石群1、東築山	A・B・C・D・E・F(徳徳堂)?・H・I						江戸時代は池に張り出した園路、護岸を池側に広げる年代確認	
	園路(藤棚以降)	池、中島、巨石群1、東築山	A・B・C・D・E・F						藤棚設置	
2	現榊木橋	池、中島、巨石群1、傘御亭崖、巨石群1、東築山、育徳堂	A・B・C・D・E・F・I	○	△ 橋撤去				1880年図面に池尻と木橋の間に橋。	
	榊木橋	池、中島、巨石群1、橋2、橋3、橋4、橋5、橋6、橋7、橋8、橋9、橋10、橋11、橋12、橋13、橋14、橋15、橋16、橋17、橋18、橋19、橋20、橋21、橋22、橋23、橋24、橋25、橋26、橋27、橋28、橋29、橋30、橋31、橋32、橋33、橋34、橋35、橋36、橋37、橋38、橋39、橋40、橋41、橋42、橋43、橋44、橋45、橋46、橋47、橋48、橋49、橋50、橋51、橋52、橋53、橋54、橋55、橋56、橋57、橋58、橋59、橋60、橋61、橋62、橋63、橋64、橋65、橋66、橋67、橋68、橋69、橋70、橋71、橋72、橋73、橋74、橋75、橋76、橋77、橋78、橋79、橋80、橋81、橋82、橋83、橋84、橋85、橋86、橋87、橋88、橋89、橋90、橋91、橋92、橋93、橋94、橋95、橋96、橋97、橋98、橋99、橋100	A・B・C・D・E・F・I	○			○	○	榊木橋の設置年代確認、昭和6年アルパム?	
D	1 傘御亭	池、中島、巨石群1、橋2、橋3、橋4、橋5、橋6、橋7、橋8、橋9、橋10、橋11、橋12、橋13、橋14、橋15、橋16、橋17、橋18、橋19、橋20、橋21、橋22、橋23、橋24、橋25、橋26、橋27、橋28、橋29、橋30、橋31、橋32、橋33、橋34、橋35、橋36、橋37、橋38、橋39、橋40、橋41、橋42、橋43、橋44、橋45、橋46、橋47、橋48、橋49、橋50、橋51、橋52、橋53、橋54、橋55、橋56、橋57、橋58、橋59、橋60、橋61、橋62、橋63、橋64、橋65、橋66、橋67、橋68、橋69、橋70、橋71、橋72、橋73、橋74、橋75、橋76、橋77、橋78、橋79、橋80、橋81、橋82、橋83、橋84、橋85、橋86、橋87、橋88、橋89、橋90、橋91、橋92、橋93、橋94、橋95、橋96、橋97、橋98、橋99、橋100	B・E・F・G・H・I	○		△	○	○	秋から春 △、夏 x	育徳堂竣工時の景観は推定
	1 南池尻の沢飛び石	池、中島、橋1、橋2、傘御亭崖、巨石群1	C・D・G-1・I・A	○	△ 橋・橋2撤去	○	○ 榊木橋	○	榊木橋の設置年代確認	
E	2 西側園路	池、橋1、橋2	C・D	○	△ 橋・橋2撤去	○	○ 榊木橋	○		
	1 園路(BからGまで)	池、中島、榊木橋、育徳堂(弓道場)	B・D・E・G-1・J				○	△		
F	2 育徳堂(弓道場)	池、中島	C・D・E・J				○	x		
	1 巨石群1園路(階段)	池、中島?、橋1、橋2、傘御亭、巨石群1、東築山	A・B・C・D・E・F・G-1・I・J	○	△ 橋・橋2撤去					
G1	2 巨石群1内園路	池、中島、巨石群1、東築山	G-1・J		○	○	○	△		
	3 巨石群2	池、中島、東築山	G-1・J・B	○				△	登壇ノ床を橋臺?、昭和以前に稲庭園区(『育徳園 加賀松雲公上巻』(京京市史稿pp222-223))複数の石が階段状に配置される	
G2	1 巨石群3 滝上段(深流) 沢飛び石	池、中島、滝上段、滝下段、東築山	A?・B・I・J			○	○	○	滝の整備年代確認	
	2 滝二組 滝下段 沢飛び石	池、中島、滝上段、滝下段、東築山	A・B・G1・G2・I・J			○	○	○	滝の整備年代確認	
3	滝北視点場	池、中島、東築山	A・B・G2・H・I・J			○	○	○	滝の整備年代確認	
	1 橋3	池、中島、巨石群1・2・3、傘御亭、東築山	B・C・D・G-1・2、H・I・J	○	x 橋3撤去	x	x	x	滝の整備年代確認	
H	2 北池尻	池、中島、橋3、巨石群3、傘御亭、東築山	B・C・D・G-1・G-2・I	○	△ 橋撤去	△ 巨石群3組直し	△	△		
	3 文学部3号館道路テラス	池、中島、東築山	A・G-2・H・I・J				○	x		
I	4 文学部図書館	池、中島、東築山	G-2・H・I・J				○	x		
	1 園路	池、中島、滝、巨石群1、御傘亭、東築山	A・B・C・D・E・G-1・G-2・I・J				○	△	ベンチ2台設置	
J	池北東の舟屋から南東池尻の船着きまで			○	x 船屋撤去	x	x	x	南東池尻船着きを埋め立て園路、埋立て池側に青石を建てる滝を表現か?年代確認	

表2-3 育徳園 江戸時代から現在までの視点場と池観 [H]

## 2-3 教育研究利用の履歴 [S]

育徳園はキャンパス内にある教育研究の場として現在まで存在してきた。これまでさまざまな教育・研究において利用されてきていると考えられるが、実際どのように利用されてきたかについて調査した資料等は見つからなかった。

そのため、近年、育徳園が教育・研究においてどのように活用されてきたかについてアンケート調査を行うこととした。

### 1) 調査の目的

育徳園がこれまで教育研究においてどのように活用されてきたかを把握し、今後の育徳園のあるべき姿を議論する上での参考資料とする。

### 2) 実施方法

- ・調査対象：育徳園に関連した教育研究が行われていると思われる4学部13専攻、及び、総合研究博物館の教員（本WGにて抽出）  
＜調査協力依頼先＞  
工学系研究科：社会基盤専攻、建築学専攻、都市工学専攻、システム創成学専攻  
農学系研究科：森林科学専攻、水圏生物科学専攻、生物・環境工学専攻、  
生圏システム学専攻  
理学系研究科：生物科学専攻、地球惑星科学専攻  
人文社会学系研究科：基礎文化研究専攻、日本文化研究専攻、文化資源学研究専攻  
総合研究博物館
- ・回答期間：2015年10月7日～10月20日
- ・周知方法：調査対象の各部局等事務局経由にて各専攻長宛にアンケート調査への協力を依頼。
- ・収集方法：調査回答は本WG事務局である施設企画課事業企画・地域連携チーム宛に直接メールまたは紙媒体にて回答。

### 留意点

調査回答についてはあくまでも協力依頼としているため、依頼した教員の方々全員から回答を得られたわけではない。

### 3) 調査内容

下記3項目について回答をお願いした。

- (1) 授業や研究等の一環として、いままでに育徳園を活用したことはありますか。
- (2) (1) で1. はい と回答の場合、以下についてお教えてください。  
①目的、②時期、③対象（場所や活用内容）、④具体的な活用内容
- (3) その他、過去の出来事を含めて、育徳園を教育・研究活動の上で活用していると聞いたこと・見たことがあれば、分かる範囲で出来るだけ詳しくお教え願います。

### 4) 調査結果

- 3) 調査内容のうち、(1)、(2)については表2-4、(3)については表2-5参照。

【調査内容】(1) 授業や研究等の一環として、いまままで育徳園を活用したことはありますか。①目的、②時期、③対象(場所や活用内容)、④具体的な活用内容。  
 (2) (1)で「1. はい」と回答の場合、以下について教えてください。

部局	専攻	NO.	(1) 回答者		(2) ①目的			(2) ②時期			(2) ③対象(場所や活用内容)		(2) ④具体的な活用内容、その他(ご意見等)
			回答者名	回答者職	授業名/研究室名/その他	担当教員/研究者名	開始時期	終了時期	通年	回数/年	場所、活用内容等		
工学系	社会基盤学専攻	1	内村太郎 准教授	○	基礎プロジェクトII	内村太郎 准教授	2004 現在	○	夏学期 4月 3回/年	○	地盤調査の演習	法文2号館側の斜面で、地盤調査の演習を行っています。	
		2	千葉学 教授	○	建築設計製図第二	岸田省吾先生他	2011.05~ 1.5ヶ月		1回/年				
	建築学専攻	3	水環基研研習室 春日都節講師	○	環境工学実験演習第一、第二	都市環境工学 コース各教員			毎 年 約 2回/年	○		水質実験、浄水処理実験の 練習資料として	
		4	村山麗人 准教授	○	海外からのゲスト、高校生 対象のキャンパスツアーで 育徳園を案内したことがある		2014 2015	○	2回/年		○	全体の見学 海外からのゲスト、高校生対象のキャンパスツアーで育徳園を案内した。 都心のキャンパスにこのような環境が存在することが高く評価された。	
	都市工学専攻	5	西村 幸夫 教授	×									
		6	窪田亜矢 特任教授	○	都市工学設計製図都市設計の 基礎II	窪田亜矢 特任教授	2010 2010				○	三四郎池周辺の敷地分析、リ・デザインの 全体構想、各号若手の設計を用いたリ・デ ザインの検討により、製図の基礎、パー ス・スナップ、模型などの空間を表現する 技法を習得するための演習。 三四郎池周辺の敷地分析、リ・デザインの 全体構想、各号若手の設計を用いたリ・デ ザインの検討および全体構想に基づいた約50mの体験施設(あすまや)を設計、建物周辺の外部空間デ ザインを行う。	
	システム創成学 専攻	-	回答なし										
	森林科学専攻	-	回答なし										
	水圏生物科学 専攻	-	回答なし										
	生物・環境工学 専攻	7	宇生 憲司 教授	○	生物環境工学 生物環境工学	宇生 憲司 (研究代表者)	2000 現在			○		農学生命科学研究科水圏生物科学専攻 の岡田茂准教授が三四郎池で微細藻を 採取し、固着の株を単離した。当研究室 ではこの微細藻の培養と有菌抽出の研 究を行っている。	
		8	水利環境工学研究 室 木村匡臣助教	×									
		9	生物プロセス工学 大下 誠一 教授	×									
		10	松田 伶 講師	×									
	農学系	森園管理研究室 齋藤 陽子 助教	11	森園管理研究室 齋藤 陽子 助教	○	森園管理学	齋藤陽子 助教 井出雄二 教授	2000 現在		○	1回/年	○	樹木の学習 三四郎池周辺の樹木を観察して、樹木の多様性と各種の特徴を理解させる。
12			山田 晋 助教	×									
13		吉田 薫 准教授	×										
14		回答なし	×										
15		大黒 俊哉 教授 土屋 一彬 助教	○	緑地デザイン実習	下田明彦 先生	2002 2011	○					緑地デザイン案の検討 (文学部3号館側人口付近) 地形と植生を踏まえた園路や広場のデザインの提案の実習	
16		石田 准教授	×									学生時代や時間に余裕があった昔は、渡り鳥の観察などをとて息抜きに愛用していました。 (二鷹野) 水・土・空気の循環の仕組みで観察館に入れて頂けたことがございます。両方とも日本の庭園文化あるいは自然概 念の紹介など特に留学生の方道に知って頂く場所として活用が期待されます。国際化に活用できるので、庭園史 などの年1~2回の講義や見学表を返けるとよいと思います。	





部局	専攻	NO	(1) 回答者		(2) ①目的			(2) ②時期				(2) ③対象(場所や活用内容)			(2) ④具体的な活用内容、その他(ご意見等)	
			回答者名	活用有無	授業者名/研究室名/その他	研究	授業者名/研究者名	開始時期	終了時期	通年	不定期	回/年	池	緑地		その他
人文社会科学系 研究部	日本文化研究 専攻	29	藤原克己 教授	x												
			回答なし													
総合研究 博物館	文化資源学研究 専攻	30	池田博 准教授		博物館学実習	池田博 准教授(分担)										
			池田博 准教授		博物館植物研究室	池田博 准教授	2008				6回/年				植物観察、種子調査、研究材料の採集等	青森県は緑が美しい郡内では珍しく良い状態で緑地が残されており、現在では郡内で少なくなつた植物も生育している。博物館学実習の一環として植物観察や種子調査、また研究室の訪問者を誘致し案内する。研究材料のサンプル収集をすることもある。
					学外の高校等の訪問時に校内観察をおこなう	池田博 准教授										
総合研究 博物館	文化資源学研究 専攻	31	矢後勝也 助教		マクロ先端研	矢後勝也 助教										
					自然観察会、他大学学生への博物館学に関する講義や実習	矢後勝也 助教	2009	2015			5回/年				【池】 昆虫の多様性調査及び観察会 【緑地】 昆虫の多様性調査及び観察会	・昆虫を中心とした周辺緑地帯での昆虫相形成に関する生物多様性研究および保全生命学的研究 ・植物を主とした昆虫の自然観察会および博物館の講義・実習 ・温暖化等により北上する指標昆虫のモニタリング調査

【調査内容】 (3) 過去の出来事を含めて、育徳園を教育・研究活動の上で活用していると聞いていると聞いたこと・見たことがあれば、分かる範囲で詳しくお教え願います。

情報提供者		内容		
部局/専攻	担当教員 /研究者名	時期	部局/専攻	内容
総合研究博物館 研究部	池田博 准教授	2010年頃	総合研究博物館	2010年頃、総合研究博物館の佐々木猛智先生が非常に珍しい貝類(基準標本が育徳園で採集されてから100年以上ぶりとか)を採集したと聞いている。
理学系研究科 生物学専攻	寺島一郎 教授	-	理学系研究科 生物学専攻	生物学科のAセメスターの講義「進化生態学」で、館野正樹准教授が樹種の解説に使用している。
		-	理学系研究科 生物学専攻	また、各種実習で、野崎久義准教授がプランクトンを採取している。
工学系研究科 社会基盤学専攻	内村太郎 准教授	-	土木工学科	本専攻(土木工学科)で、測量実習に三四郎池を使っていたと聞いています。
工学系研究科 都市工学専攻 (先端科学技術研究センター)	西村 幸夫 教授	-	農学部	私が学生の頃、農学部にて井出先生の講義で行った事があります。
総合研究博物館 研究部	矢後勝也 助教	2008年から	理学系研究科 生物学専攻	2008年から大学院理学系研究科生物科学専攻・進化多様性大講座の教員の方々(塚谷裕一先生、上島励先生ら)が継続的に生物相調査を行っているようである。
		2010年から	農学生命科学研究科保全生態学研究室、生産技術研究所喜連川研究室、生活協同組合パルシステム東京の共同で、主にチヨウ類の先端的な市民参加型モニタリングを2010年から心字池を含む本郷キャンパス内で進めている。	

### 3. 育徳園の価値（事前評価）

#### 3-1 育徳園の価値 [O, T, H]

育徳園は、加賀藩邸時代に形成された日本庭園が、大学という教育・研究機関に取り込まれ、独特な利用をされてきたことによって、その価値を醸成してきたと言える。その価値は、池と小島を中心とした庭園の面影が残され、自然環境に対して大きな介入が行われず、穏やかで文化的な利用がなされ、また教育・研究のフィールドとして活用されてきた歴史に基づくものであり、以下の三つの要素が調和的に共存してきた文化的な価値であると言える。なお、これらの価値は、学内だけでなく広域的な生態ネットワークや来訪者などの外部環境にも波及している。

- ① 自然環境：量的・質的にきわめて優れた動植物の生育環境と水面
- ② 歴史の重層性：加賀藩邸時代から近現代までの歴史的重層性を示す痕跡
- ③ 保健休養：育徳園の自然環境および歴史的記憶を享受できる回遊性と眺望景観

これらの価値は、過去のある一時代に還元されるものではなく、自然環境にしる文化財的な痕跡にしる、教育・研究利用の歴史の中でその時代ごとの営みが蓄積されてきたことにその根源的な意義を持つ。つまり、育徳園の価値は動的であるという点において、一般的な庭園との大きな相違があり、またそれゆえにその動的な価値を今後どのように制御していくべきかを考える必要がある。

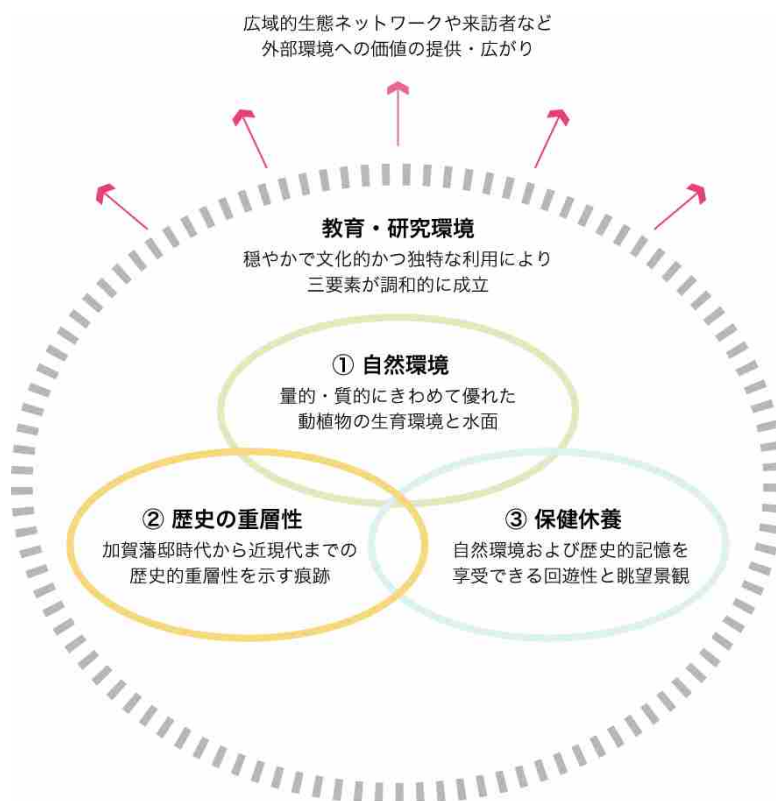


図 3-1 育徳園の価値概念図（再掲）

## ① 自然環境

育徳園に今日見られる豊かな自然環境は、多様な種の植物・動物から構成されるものであり、東京都心にあっては貴重な緑の空間を形成している。樹木調査の記録によれば、育徳園の大木の多くは落葉広葉樹である。ヒロハノミズバイなどの一部の珍しい樹木は、人の手で持ち込まれたものであろう。近年シュロの個体数が増加しているが、これは他の緑地でも共通する現象であり、今後も同様の傾向が続くと予想される。要注意外来生物に指定されているトウネズミモチも低木層で広がりつつあるが、他の種も含め低木・草本層の植生については十分な情報がない。

動物相については、都心としては高い生物多様性を保有していると想定されるが、まとまった情報が存在しておらず、特にその空間的な分布の情報はほとんどない。鳥類については、育徳園の階層的に発達した植生や水域が多様な種の生息環境を提供しており、樹洞や枯れ木はコゲラなどにとって貴重な空間となっている。チョウ類などでも東京都心としては貴重な種が生息している。一方で、水生生物については特定外来生物に指定されるものも含まれており、ブルーギル、オオクチバス、ミシシippアカミミガメ、アメリカザリガニ、ウシガエルなどが確認されている。

以上のように、現在の育徳園には、都心としては貴重な自然環境と、特定外来生物などの駆除が望まれる生物が混在しており、さらなる生物学・生態学的な調査を踏まえた上で、適切な保全・管理が実施されることが望まれる。特に、育徳園がタイプロカリティとなっている種については十分な対処が望まれる。このことは、本学の教育研究上の利用という観点からも意義がある。また、都心におけるエコロジカルネットワークの拠点の1つとしての評価も、現状では十分な情報がないが、今後検討されることが望まれる。

水環境についてみると、キャンパスに降った雨水の浸透・貯留に強く貢献していることが推測される。こうした役割を促進していくことは、慢性的に低くなっている池の水位の回復にも貢献することが期待される。ただし、雨水が池に流入する際に斜面の土壌や植生を削っている現象も確認されており、こうした問題にも合わせて対処する必要がある。

## ② 歴史の重層性

江戸時代に形成された庭園が大学に取り込まれ、教育・研究環境として利用されてきたという歴史を持つ庭園は少ない。育徳園は、加賀藩邸時代から近代化の時代を経て現代に至るまでの過程において、その時代の価値観に応じた整備等が行われ、少しずつその姿を変えてきた。その重層する歴史の痕跡が園内各地に残っている。

現在の育徳園には江戸時代の遺跡と考えられる巨石群、橋の痕跡などを確認できる。江戸時代の面影を残すものはこれらと中島などに限られており、本郷キャンパスの歴史を知るという観点からも希少なものである。西南の崖にある巨石群は加賀藩の絵図、庭園図に描かれている可能性がある。池の南にある擬木橋の橋下には江戸時代の橋の基礎と考えられる方形の石材、西側には橋挟石が確認できる。しかし、巨石群の護岸部分ではコンクリート塊、レンガで高さ調整が行われており、巨石群の中には自然の営力で移動したものや後世の工事で移動した可能性もある。後世に手を入れたか否か、どう整備するかを判断するには遺跡調査を行う必要がある。また、関東大震災後の時期に整備されたポンプ場跡などのキャンパス近代化の遺構についても、その保存についての検討が必要である。このように、育徳園が歩んできた重層的な歴史を示す遺構が幸いにも少しずつ残されている。

また、歴史的な痕跡は物的なものに限らず、眺望景観としても残っている。江戸時代に育徳園八景・八境が存在したように、また三四郎が池越しの景観を紹介したように、特定の視点場から眺める景観も歴史的な痕跡のひとつであると言える。

このように、育徳園には、江戸時代の歴史的痕跡のみならず、さまざまな時代の歴史が重層的に蓄積されている。

### ③ 保健休養（回遊性・眺望景観）

育徳園は、加賀藩邸時代に回遊式庭園として生まれ、その後さまざまな利用形態の変化がありつつも、現在に至るまでその回遊空間を保持してきた。育徳園がキャンパス内外の人々に長く愛され続けてきた理由は、そこに人が自由に入っていくことができ、散策し、水と緑に囲まれて憩いの時間を持つことができるためであり、また重層する歴史に思いを馳せることを可能にする空間が残されているためである。つまり、育徳園の基本的な価値のひとつとして、園内を回遊し憩いの時間を持つという保健休養の観点が挙げられ、また同時に、それを可能にする回遊空間を豊かに安全に保つことが重要であると言える。

また、園内各所のベンチで休むことや、自然環境を眺め愛でること、歴史的記憶について理解を深めることも保健休養に含まれよう。これらを充実させる上で、眺望景観の視点場が重要である。計画的にデザインすれば、これら三つの行為を同時に満足させる環境を提供できる可能性があるためである。育徳園では、江戸時代の回遊式庭園をベースに明治時代、大正時代、昭和時代とそれぞれの時代の価値観に応じた整備が行われてきた。高台の上の旧御傘亭のように、江戸時代から現在まで継続して機能してきた視点場もあるが、多くの視点場では樹木の成長により、適切に眺望景観が得られないなどの機能不全に陥っており、保健休養の観点から、視点場群の再編集が必要となっている。

さらに、山上会館をはじめとする園内の、もしくは隣接する建築物・工作物と自然環境が一体となって形成される空間が果たす役割も重要である。

### 3-2 育徳園のあり方 [O, T]

今後の育徳園は、教育・研究環境において「自然環境」「歴史の重層性」「保健休養」という三つの価値要素が調和的に共存してきたという文化的な価値を、凍結的に保存するのではなく動的に保全していくべきであると考える。

このような考え方は、既存のキャンパス計画とも矛盾なく合致する。東京大学キャンパス計画大綱では、本郷地区キャンパスにおいて、歴史的空間構造及び景観（建築群および外部空間）の価値を将来にわたって継承することをキャンパス計画の第一義的な目標として位置づけており、また、キャンパス計画要綱では、歴史的空間かつ緑地として位置づけられ、パブリックスペースWG 報告書では歩行者区域の庭園として位置づけられている。これらの位置づけの重ね合わせこそが冒頭に述べた「あり方」であると言える。なお、繰り返しになるが、育徳園における歴史性の価値は、過去のある一時代に還元されるものではなく、加賀藩邸時代に端を発し教育・研究利用の中で時代ごとの営みが蓄積されてきた、その重層性にこそある。

ここでは、そのような育徳園のあり方を実現していくために検討すべきと考えられる論点として、以下の9点を提起する。なお、これらの論点は時間軸上で考えていくべきものであり、ここでは特に急ぐものとそれ以外を分けて整理している。

#### 1) 短期的に実施すべき事項

- ① 園路の安全性の確保のための植生等の管理
- ② 園内の安全性確保のための柔軟な運用
- ③ 外来種の駆除および随時可能な植生管理の工夫
- ④ 保護すべき史跡の明確化および最低限必要な調査・保護措置
- ⑤ 利用者への案内

#### 2) 中長期的に実施すべき事項

- ⑥ 持続的な環境管理システムの構築
- ⑦ 園路の再デザイン
- ⑧ 視点場の再デザイン
- ⑨ 眺望景観・史跡の顕在化措置

## 1) 短期的に実施すべき事項

### ① 園路の安全性の確保のための植生等の管理 …… **保健休養**

園路を歩く歩行者の安全性を確保することは、喫緊の課題である。過去にも少なからず枝の落下等の事故が発生しており、特に台風や積雪の後には危険な状態となりがちである。

そのため、歩行者に対して危険性を有すると考えられる樹木(枯木・枯枝・伸びすぎた枝など)を選別し、樹木単位で管理を行うなどの方法を検討すべきである。また、そのための必要最低限の植生調査を行うことを検討すべきである。ただし、上述した「自然環境」の観点なども加味した総合的な管理方法を検討することや、できる限り予算を抑え、なおかつ計画的で効果的な管理を行うための具体的な体制の裏付けを併せて検討することが必要である。

また、ところどころ園路の階段が崩落していたりするなど、明らかに危険な箇所も存在するため、植生の管理に加えて、園路自体の危険箇所の手当を検討すべきである。

表 3-1 育徳園内で発生した危険事象リスト(倒木・伐採等)

年度	発生時期	場所	危険事象等
H23	H23年5月	池周辺	倒木
	H24年1月	池南側斜面	倒木
H24	H25年1月	北側・南側園路、山上会館出入口付近	枝折れ、幹折れ
		藤棚北側	フジ腐朽、枝折れ
		主要入口付近	危険喚起の立て看板設置
H25	H25年7月	北側園路	園路を塞ぐ倒木、枝折れ
	H26年2月	育徳園内全体	降雪による倒木(10本)、枝折れ(111箇所)、園路通行不能(10箇所) <2/14~2/15降雪27cm>
		御殿下側入口付近	腐朽(スダジイ)、日照不足による枯死(アカマツ)
		園内各所	台風による倒木(4本)
	園内各所	危険樹木伐採(シュロ19本、スダジイ1本、セイヨウトチノキ1本、ヤマザクラ1本、エノキ1本、アカガシ1本、イイギリ1本)	
H26	H26年5月	西側園路	枝折れ
	H26年5月	東側園路	園路を塞ぐ倒木
	H26年6月	池東側	倒木(※池の方向への倒木)
	H26年6月	池西側	園路を塞ぐ倒木
	H26年9月	池北側	大雨による倒木(セイヨウトチノキ)のより駐車車両損傷
	H26年10月	西側園路	園路を塞ぐ倒木
H27	H27年5月	藤棚付近	園路を塞ぐ倒木
	H27年7月	北側入口付近	倒木
	H27年11月	銅像裏	倒木
		北側(安田講堂側構内道路付近)	駐車車両の支障となるため一部樹木剪定
		弓道場南側	実生木の倒木により弓道場屋根瓦損傷
		弓道場西側	危険樹木伐採(マテバシイ1本)

### ② 園内の安全性確保のための柔軟な運用 …… **保健休養**

園内の安全性が特に脅かされる台風(暴風)通過後と積雪後は、安全性が確認されるまでの間、入園を制限(一時的に立ち入り禁止)するなどの柔軟な利用規制を行うことが現実的な最善策ではないかと考えられる。現在は写真のような注意喚起看板が入り口付近に掲示してあるが、管理責任の放棄のようにも読めてしまうため、早期に改善すべきと考える。なお、小石川植物園では

気象警報が発令された場合、その時点から安全が確認されるまで臨時閉園することを原則とした運用としている。

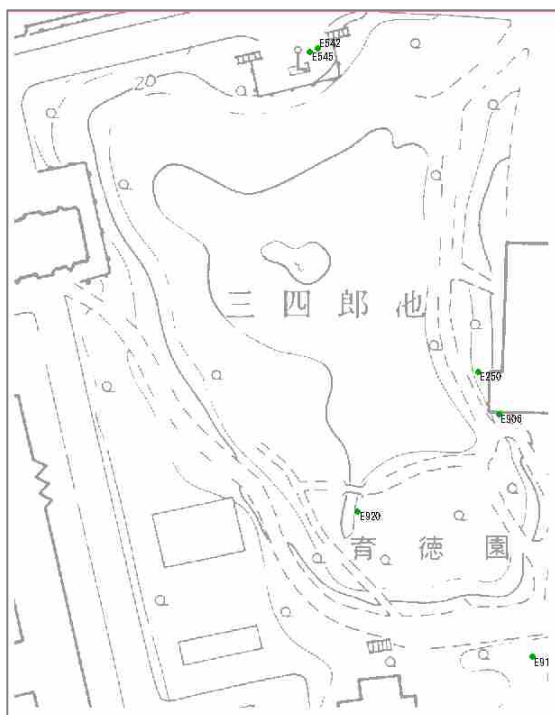


写真 3-1 育徳園の主要入口（6箇所）に掲示してある注意喚起看板

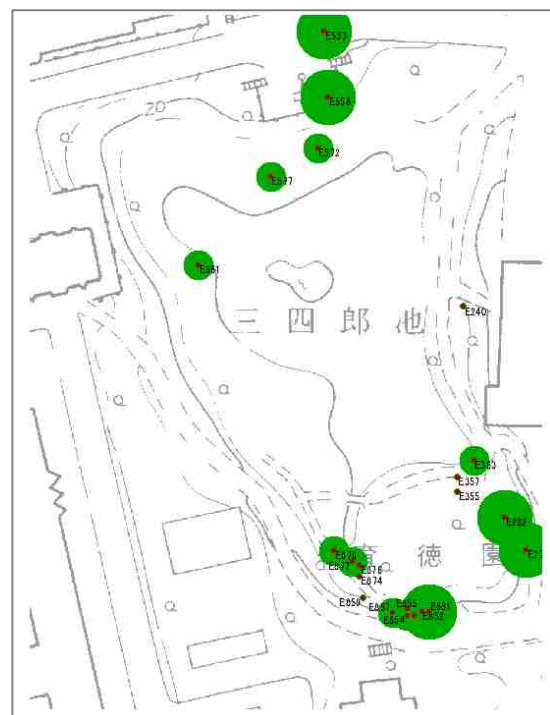
③ 外来種の駆除および随時可能な植生管理の工夫 … 自然環境 保健休養

育徳園本来の植生をどのように定義し、またどのような種を保存すべきかについては慎重な検討が必要であろうが、個体数を劇的に増加させているシュロやトウネズミモチといった外来種を駆除することについて異論はないであろう。これらについては、すみやかな駆除の実施が待たれる。また、池の中の外来種についても対策を検討すべきである。

また、現在行われている植栽管理の中で、随時実施が出来る工夫もある。例えば、育徳園外縁部における過度な落ち葉清掃は、腐葉土の供給を減少させる要因にもなるため、適切な清掃方法を検討することが望ましい。



シュロの分布



トウネズミモチの分布

図 3-2 1998 年のシュロ・トウネズミモチの分布

出典：「東京大学本郷キャンパスの樹木」東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻

※1.2m 高の幹周り（胸高直径）が 30cm 以上のもののみ



#### ④ 保護すべき史跡の明確化および最低限必要な調査・保護措置 … 歴史の重層性

育徳園の歴史の重層性を直截に物語るものが史跡である。例えば、江戸時代の遺跡と考えられる巨石群（加賀藩の絵図・庭園図に描かれている可能性あり）、橋の痕跡（江戸時代の橋の基礎と考えられる方形の石材、西側には橋挟石が確認できる）や、キャンパス近代化の過程を示す遺構であるポンプ場跡（関東大震災後に整備）や文学部から育徳園へと降りる階段なども存在する。

理想的には、遺跡調査を行い、これらの史跡以外のものも含めた史跡を発掘し、それらが保存に値するかどうかを検討することが望まれるが、自然環境への影響面および費用面において容易ではない。そのため、緊急的な措置として、緊急的に保護すべき史跡を選定し、ミニマムな調査を実施した上で、最低限必要な保護措置を講ずることが望ましい。

#### ⑤ 利用者への案内 … 自然環境 歴史の重層性 保健休養

江戸時代の歴史的痕跡のみならず、さまざまな時代の歴史的重層性がみられることが育徳園の価値のひとつであり、今後はそのさまざまな痕跡について、またそれらのつながりについて、利用者の理解を助けるような工夫が望まれる。

これには、現地での案内板の設置のようなハード面での対応もあり得るが、本学のホームページでの情報公開や冊子のとりまとめなど、より手軽で安価かつ効果的な方法も多く考えられる。広く育徳園の在り方に関する理解を得ていくことにも直結するため、すぐに取り組める方法から実施していくことが望ましい。

## 2) 中長期的に実施すべき事項

#### ⑥ 持続的な環境管理システムの構築 … 自然環境 保健休養

短期的に実施すべき安全性確保のための植生管理システムや、外来種駆除等の試みだけでなく、中長期的に展開しうる植生管理システムを検討することが必要である。安全性確保の観点からは、幹の空洞化がひとつの維持管理指標と考えられてきたが、近年はそのような前兆のない大木が急に倒れることもあり、大きくなりすぎた樹木には警戒が必要であると考えられる。環境的にも大木によって日光が遮られるなどの悪影響が生じていることも鑑み、中期的には大木に対する維持管理方針（剪定・伐採）についても検討が必要である。また、中長期的には育徳園内の環境の多様性を健全に保持していくことが重要な課題となるため、基盤となる植栽等の調査・データベース化が必須である。この際、環境の多様性をモニタリングする観点から、ある程度低木についても把握できるような調査・データ整備が望ましい。さらに、たびたび見られる「不適切な植栽」（すぐに枯れてしまう場所に植栽する等）が生じないよう管理部局等との連携を図ることが求められる。

また、植生以外にも、育徳園のアイデンティティを構成する要素である水（水質・水量）や土壌など、総合的な環境管理システムの検討が必要である。これらの検討に際しては、回遊する歩行者への安全性だけでなく、自然環境への適切性や、重要な眺望景観を確保するための視界確保など、育徳園の価値を構成する三つの要素を調和させる総合的な観点からの検討が求められる。

また、できる限り予算を抑え、なおかつ計画的で効果的な管理を行うための具体的な体制等を併せて検討することが必要である。例えば、土地の改変に及ぶ際には、学内の専門家の意見を聞くこととするなどの方法があり得る。

### ⑦ 園路の再デザイン … 自然環境 歴史の重層性 保健休養

人が散策できるための回遊空間を豊かに安全に保つことが重要であるが、現在は飛び石がコンクリートで固められ、擬木の橋が架かり、ベンチの量も質も低く、豊かな園路空間とは言いづらい。園路を、自然環境や歴史の重層性と調和するものとして再デザインすることが必要である。

なお、現在のコンクリートで固められた園路が導水路となり雨水が集中し、園路屈曲部などで土壌の浸食が起きていると考えられる。特にそのような現象が顕著に見られる箇所は短期的に整備を実施することも検討すべきである。具体的には、例えば、雨水を浸透させ園内の浸食を避ける飛び石とすることが考えられる。

また、山上会館をはじめとする園内の、もしくは隣接する建築物・工作物と自然環境が一体となって形成する空間について正しく評価を行い、適切な空間へと誘導していくことが重要である。本書では建築物・工作物について十分な検証を行っていないため、今後の課題としたい。

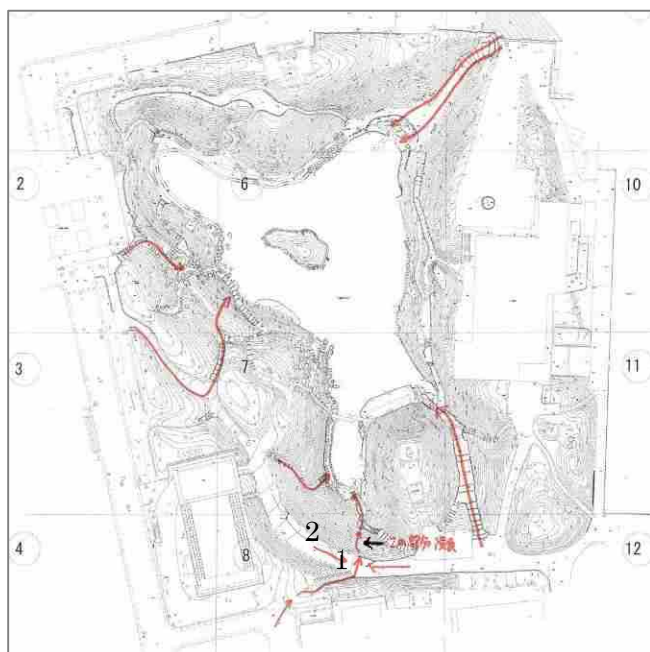


図 3-3 雨水の流れ (2015 年 9 月 17 日・原祐一氏記録) [H]

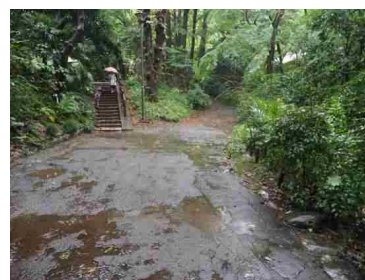


写真 3-2 雨水の流れ 1



写真 3-3 雨水の流れ 2

### ⑧ 視点場の再デザイン … 自然環境 歴史の重層性 保健休養

園路と視点場は緊密な関係にある。上述した園路の再デザインと併せて、戦略的に視点場・眺望景観を再編集し、特に重要な視点場の環境を良好なものへと再デザインすることも検討すべきである。例えば、山上会館テラスは車椅子の方も眺望景観を楽しめるようバリアフリーに配慮することが考えられる。なお、ここでは建物管理主体に協力を求めていくことも必要となろう。

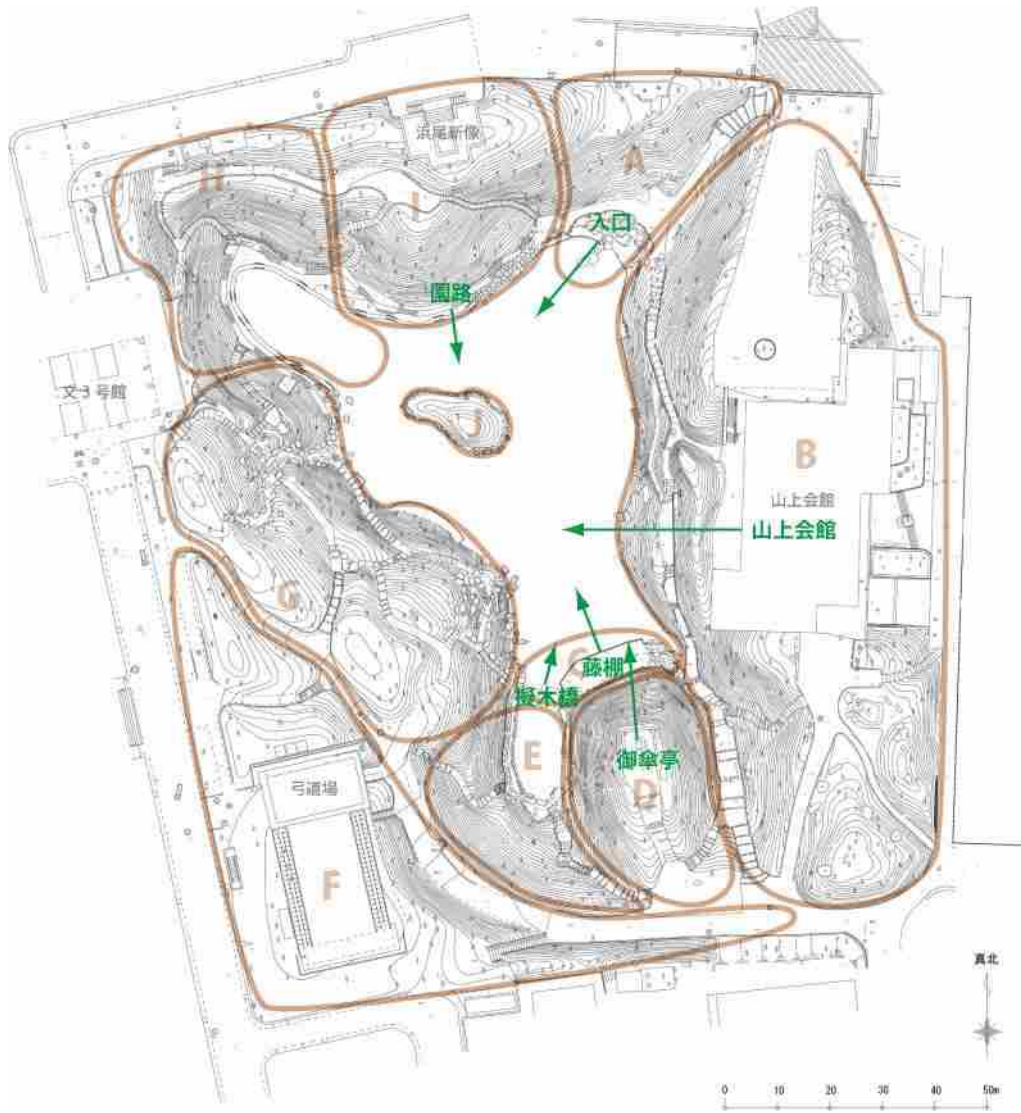


図 3-4 重要な視点場と眺望景観（試案）[O]



写真 3-4 山上会館 1 階の育徳園借景



写真 3-5 山上会館テラスの様子

重要な史跡的要素について、中長期的に、自然環境に負荷をかけないように十分注意をした上で顕在化措置を検討すべきである（方法は巻末補遺参照）。特に重要な視点場からの眺望景観を維持するための剪定をすることも考えられる。

育徳園では、埋蔵文化財調査室により山上会館・御殿下記念館地点、御殿下グラウンド地点で現在の山上会館とグラウンドの遺跡調査が行われ、検出された遺構と絵図の照合が行われている。庭園図、絵図、文献史料に基づき、考古学、文献史学の分野から検討が行われているが、文化財庭園研究の視点による研究は行われていない。このような観点からの研究が待たれるものの、「東京大学本郷キャンパス敷地測量図」をベースに簡易な現地調査を行った範囲でも、興味深い遺構の存在に気づかされる（下図参照）。歴史的な重層性および回遊と共にそれらを楽しめるように、調査と顕在化措置を検討すべきではないか。

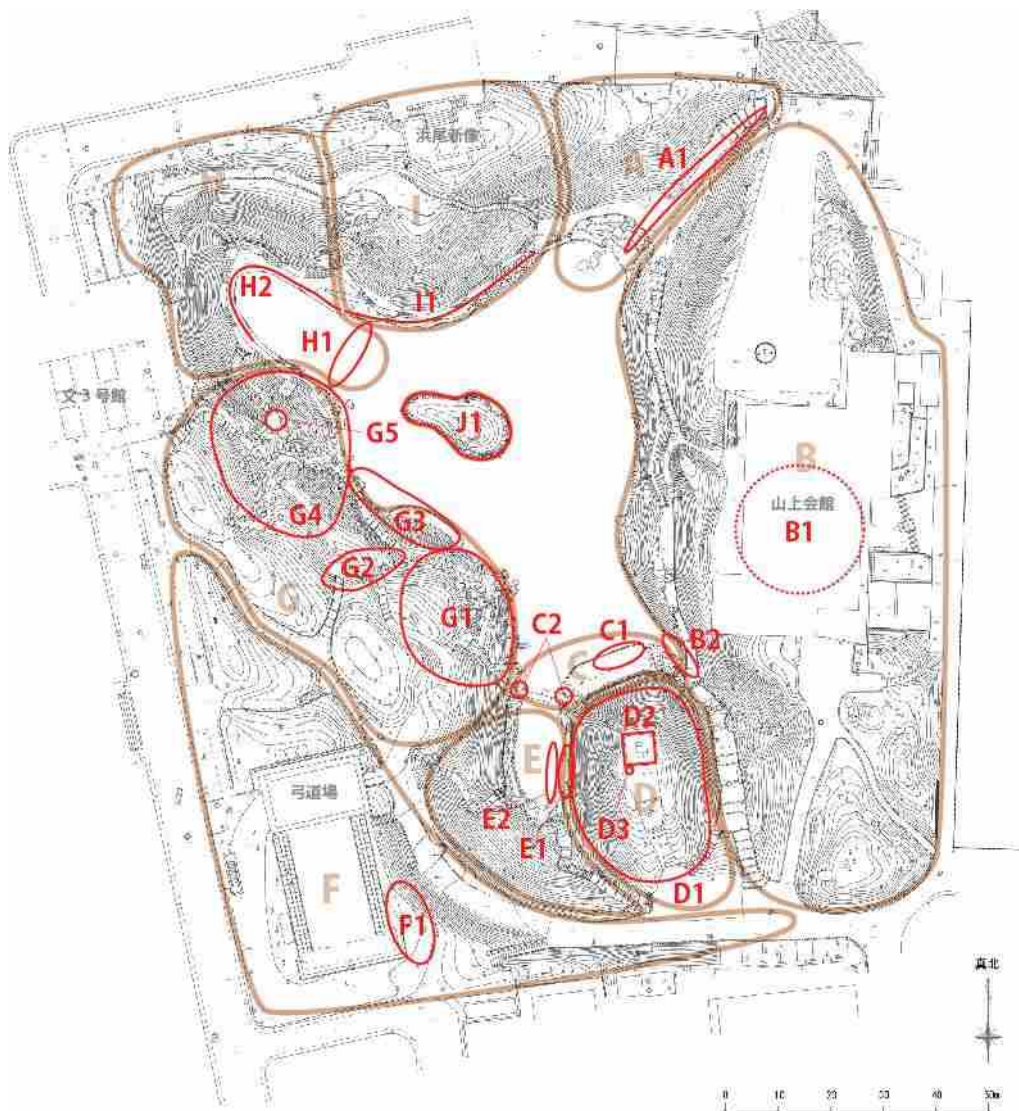


図 3-5 江戸時代の史跡・遺跡（再掲）[O]

## 4. 参考資料

### 4-1 年表 [H]

育徳園の歴史的変遷を辿る際、ほぼ毎年作成されたキャンパス内の建物配置図が重要な資料となる。しかしこれらは明治 13 年以降に作成されたもので、それ以前の空間は絵図をはじめとする散在する情報を収集統合する必要がある。そこで、ここでは育徳園ができた江戸期から明治初期の時代について、歴史的な出来事および現存する絵図等の地図資料について、年表形式で情報を整理する。(東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 より作成 \*加筆)

明治初期以降については、主にキャンパス内の建物配置図を基に育徳園の空間改変に関する事項を抽出、整理する。

表 4-1 育徳園年表

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 年表 (\*年表に追加) と大学構内図面より作成、

和暦		西暦	事項 (A~J は育徳園の池のエリア分けに対応)	絵図・地図・構内図面・写真
元和	2・3年	1616 ~ 1617	3代利常、大久保相模守忠隣邸跡地を下屋敷として与えられる。	
寛永	3年	1626	初めて周囲を木柵をもって囲む。	
	4年	1627	利常の子利次・利治や生母寿福院等、国元より出府いして居住する。また邸内に多く長屋を造営して、小田原町・メッタ町に賃居していた微臣を収容する。	
	6年	1629	寛永3年から造営の御成御殿完成。4月将軍徳川家光、前将軍秀忠御成。	
	10年	1633	前年12月上屋敷辰口邸焼失。利常、本郷邸に仮住して辰口邸再建を指揮する。	
	15年	1638	3代利常、本郷邸に園池を設ける。のちの育徳園。*	
	16年	1639	邸内の一部(東側)を富山藩・大聖寺藩上屋敷地として貸し与える。隠居した利常も居住する。	
慶安	17年	1640	3月将軍家光再び御成(『徳川実記』、『三壺記』は15年2月につくる。)	
	3年	1650	3月本郷富士塚周辺から出火、本郷邸全焼。利常は大聖寺上屋敷に仮住。翌年8月再建なる。	
明暦	3年	1657	正月明暦の大火で上屋敷辰口邸焼失。5代綱紀本郷邸に避難して、以後常居する。7月半込邸の替地の一部として、藩邸南に接続する同心本多丹下・朝比奈左近・坪内惣兵衛の同心組屋敷2万坪を与えられる。	
万治	2年	1659	本郷6丁目屋敷(101坪)を200両で永代買取する(本郷「物見所」のところ)。	
	3年	1660	正月湯島天神前から出火、邸内「御表門」およびその続き長屋焼失。	
寛文	3年	1663	3月本郷5丁目門前南角屋敷(11坪余)を永代買取する。	
	5年	1665	証人制度廃止。その後も黒多門邸(証人屋敷)は存し、間番・足軽等が居住する。	
	11年	1671	5代綱紀は整備を行った育徳園に林鷲峰(林家2代)、林鳳岡(林家3代)、林春東、人見友元(竹洞)、野間三竹、野間允迪、平巖仙桂、澤田宗堅、源(五十川)剛伯、木下順庵(別資料では欠席とある)、9名の儒者を招き「詩讌」を開催。「八景八境の詩文」を詠む。*	
天和	2年	1682	12月白山から出火、本郷邸焼失。綱紀は駒込邸に避難。	
	3年	1683	3月上屋敷となる。 3月黒多門邸を大聖寺邸中に加える。	
貞享	4年	1687	殿舎(貞享2年から建設)竣成。9月綱紀移徒。	
元禄	元年	1688	池は現在より小さく、南側に谷。栄螺山?(F)、中ノ島(I)、富士山?(現在は園外)。*	「武州本郷第図」(財)前田育徳会尊経閣文庫蔵 *
	15年	1702	4月御成御殿竣成(藩邸南側東半分)、将軍綱吉御成。 南側に池を拡張、南側の谷を埋め立て、御傘亭を築く。この年までに現在の池の形状になる。御傘亭(D)、栄螺山(F)、中ノ島(I)、富士山(現在は園外)。*	「御上屋敷惣絵図」(財)前田育徳会尊経閣文庫蔵 *
	16年	1703	11月小石川水戸藩邸から出火、本郷邸焼失。宝永5年再建なる。	
宝永	4年	1707	富士山噴火(宝永噴火) *	
	5年	1708	8月吉徳に徳川綱吉の養女松姫降嫁の命が下り、10月「御守殿」造営。11月吉徳、駒込邸より本郷邸に移り、同月松姫入興。	
享保	6年	1721	2月吉徳夫人死去のため「御守殿」撤去。	
			3月半込木津屋町より出火、邸内北端の「追分御門」など焼失。	

	15年	1730	正月下谷七軒町から出火、ほぼ全焼。再建は、財政上の問題からその規模を必要最小限にとどめる。	
元文	元年	1736	7月宗辰の居館完成（邸内北東隅、後に「隅之御居宅」と称す）。	
	3年	1738	正月無縁坂町屋から出火、割場・作事所・火消道具置所など邸内東側焼失。 3月大書院・小書院・舞台など完成。	
延享	2年	1745	7月世子宗辰、襲封のため駒込邸より本郷邸に移る。	
宝暦	3年	1753	5月世子重靖、襲封のため本郷邸に移る。	
明和	8年	1771	8月重教の隠居宅として「西御殿」造営開始。	
安永	元年	1772	2月丸山から出火、「西御殿」や邸内北側長屋などを焼失。	
天明	2年	1782	7月地震により被害を受ける。	
			8月風害を受ける。	
寛政	元年	1789	6月世子斉敬居館「新御居宅」の上棟式を行う。	
	8年	1796	11月世子斉広の居所となった「御新居宅」を「北御居宅」と改称。	
享和	2年	1802	11月重教夫人寿光院のため「梅之御殿」（後治脩夫人法梁院居住）を新築。	
	3年	1803	3月指違町より出火、本郷通り沿いの「物見」類焼。 11月「梅之御殿」を「梅之御居宅」、「北之御殿」を「北之御居宅」と改称。	
文化	3年	1806	9月「梅之居宅」を「梅之御殿」は旧称に戻す。	
	9年	1812	11月地震により小破する。	
文政	6年	1823	8月大風により被害を受ける。	
	8年	1825	7月浴姫のために「御住居」（安政3年2月から「御守殿」と称す）造営開始。 この年既に「梅之御殿」なし。	
			12月邸内「北之御居宅」から出火、「北之御居宅」および富山藩上屋敷・大聖寺藩上屋敷の一部を焼失。	
	9年	1826	12月幕府、浴姫の「御住居」門前の町屋引払を命ず。これを「御拝借地」として邸内に囲い込む。	
	10年	1827	閏6月節約のため「下御台所」を廃止する。	
			11月浴姫入興。	
11年	1828	3月将軍家斉御成（「御通拔」）、斉泰夫人を訪う。		
12年	1829	大聖寺藩上屋敷新広式建設のため、邸内東側「御作事所」周辺942坪余を大聖寺藩へ「賃地」する。		
天保	元年	1830	2月邸内地蔵堂に天満宮を勧請し、「鎮守」とする。	
	3年	1832	2月斉広夫人真龍院・重教側室青操院、本郷邸より駒込邸に移る。	
	12年	1840	正月世子慶寧の「東御居宅」竣成（6月移徙）。	「加賀本郷邸図」（1840～45年頃）金沢市立玉川図書館所蔵 *
弘化	2年	1845	5月本郷邸・平尾邸に「鉄砲角場」竣成。	
	3年	1846	正月本郷丸山から出火、「南火之見櫓」及びその周辺の長屋を焼失。	
嘉永	3年	1850	3月将軍家慶御成（「御通拔」）、斉泰夫人を訪う。	
	4年	1851	4月邸内北側追文塚場周辺に「稽古所」新設を命ず。	
	6年	1853	12月邸内に「新角場」を建設することを幕府から許可される。	
安政	2年	1855	10月安政の大地震により邸内全体にわたって大きな被害を受ける。	
	3年	1856	8月大風雨により大きな被害を受ける。	
	5年	1858	2月「御守殿」内に稲荷社を勧請する。	
文久	2年	1862	閏8月参勤交代制緩和。	
			9月世子慶寧、その夫人等とともに帰国する。	
3年	1863	「八筋」長屋1～3番をはじめ、多くの長屋が取り壊される。		
		4月斉泰夫人、国元へ帰る（元治元年<1864>11月～明治元年3月再び在府）。		
明治	元年	1868	閏4月本郷春木町より出火、本郷通り沿いを残して邸内の大部分を焼失。 10月加賀藩、新政府から本郷邸および平尾邸を従来通り与えられ、他の屋敷は後日与えるべきことを命ぜられる。	
			同月明治天皇、氷川神社に行幸の途中本郷邸「物見所」に休憩する（明治3年閏10月も）。	
			12月木挽町築地元稲葉美濃守（淀藩）の屋敷を与えられ（築地邸）、上屋敷とする。本郷邸は中屋敷、駒込邸は抱屋敷となる。	
	2年	1869	5月本郷五・六丁目の門前抱込町を返納する。	
	3年	1870	5月築地邸を上地、筋違門（相生橋）内福山藩邸（筋違橋邸）を与えられる。	
			8月筋違橋邸を上地。本郷邸を官邸、平尾邸・駒込邸を私邸とする。	
	4年	1871	6月本郷邸の一部（藩邸南西隅、15,078坪）を私邸として、他はすべて新政府に返上。	
	9年	1876	11月東京医学校本郷移転*	
10年	1877	4月東京大学創設*		
		ジョサイア・コンドル、工部大学校造家学科の外国人教師として来日*		
13年	1880	石橋か(A) 氷室2棟(B) 橋1撤去(C) 御傘亭基礎(D) 橋2撤去、南西池尻橋、御唐傘亭西側に園路(E)	東京大学医学部平面図	

			巨石群 2?(G) 橋 3 撤去(H)		
16	年	1883 か	J.コンドル、「東京大学建物配置案」*		
16	年	1883	道が排水溝を縦断、石橋か(A) 氷室 2 棟、「芝」(B) 御傘亭基礎(D) 南西池尻橋なし(E) 「檜」(F) 「檜」(I) 排水溝 開渠(園外)	「東京府武蔵国本郷区 本郷元富士町近傍」『参 謀本部陸軍測量局五千 分ノ一東京図測量原 図』	
19	年	1886	氷室撤去、「運動場」の築山東側削平(B)	帝国大学平面図	
26～ 27	年	1893 ～94	「集会所」、建屋 1 棟(B) 建屋 1 棟(H)	帝国大学略図	
29～ 30	年	1896 ～97	建屋 1 棟「小便」他判読不可(H)	帝国大学略図	
31～ 32	年	1898 ～99	「集会所」を増築(B) 建屋 1 棟(F)	東京帝国大学略図	
32～ 33	年	1899 ～ 1900	「集会所」裏道(B) 栄螺山削平(F) 排水溝 暗渠化(園外) 育徳園北側道路西へ延長(園外)	東京帝国大学平面図	
33～ 34	年	1900 ～01	「会議所」に名称変更(B)	東京帝国大学平面図	
34～ 35	年	1901 ～ 1902	建屋 1 棟撤去(F)	東京帝国大学平面図	
37～ 38	年	1904 ～ 1905	増築(廊下で建屋を繋ぐ)、建屋 1 棟増(B)	東京帝国大学平面図	
39～ 40	年	1906 ～ 1907	運動場北西に「道場」、築山削平、「運動場」側に園路(B)	東京帝国大学平面図	
40～ 41	年	1907 ～ 1908	建屋増築、建屋 1 棟増(H)	東京帝国大学平面図	
42	年	1909	池、中ノ島、「会議所」、北西池尻からの景観	『医学生とその時代』 2008 掲載写真	
43～ 44	年	1910 ～1911	排水溝暗渠化(A) 廊下と建屋を撤去、増築計画(B)	東京帝国大学平面図	
44	年	1911	園路	『医学生とその時代』 2008 掲載写真	
44～ 45	年	1911～ 1912	「会議所」北側増築開始(B)	東京帝国大学平面図	
大正	1～2	年	1912 ～ 1913	「会議所」増築終了(B)	東京帝国大学平面図
	2～3	年	1913 ～ 1914	北側増築部「本部」(B)	東京帝国大学平面図
	12～ 13	年	1923 ～ 1924	建屋焼失(B) 建屋焼失(H)	東京帝国大学平面図 (関東大震災の被害)
昭和	3	年		池	東京帝国大学新聞 掲 載写真
	4?	年	1929	「本部会議所」建築計画(B)	東京帝国大学本部構内 建物配置図
	5	年	1929	互い違いの橋、現在の擬木橋か(C) 巨石群 1、巨石群 3 滝に組み替え?(G) 図書館前噴水(園外)	東京帝国大学本部構内 建物配置図
	6	年	1930	滝、園路(G)	
	7	年	1932	中ノ島がヒョウタン形に(J)	東京帝国大学本部構内 建物配置図
	10	年	1935	「育徳場」(弓道場) 竣工(F)	東京帝国大学本部構内 建物配置図
	14	年	1939	「山上会議所」鳥瞰図(完成図?) (B)	東京帝国大学本部構内 建物配置図

21年	1946	池	東京帝国大学新聞 掲載写真
22年	1947	「本部会議所」竣工(B)	東京帝国大学本部構内及農学部建物配置図
35年	1960		『写真集東京大学』
40年	1965	「経済学部研究室」、「富士山」上に計画(園外)	東京大学本部及農学部構内建物配置図
41か年	1966	「経済学部研究室」、「富士山」の痕跡?(園外)	東京大学本部及農学部構内建物配置図
42年	1967	「経済学部研究室」、「富士山」なくなる(園外)	東京大学本部及農学部構内建物配置図
46年	1971	「山上会議所」(B)	東京大学本郷地区(本部、農学部、旧浅野邸、附属李病院本院)建物配置図
58年	1983	「山上会議所」撤去(B)	東京大学本郷地区(本部、農学部、旧浅野邸、附属李病院本院)建物配置図
61年	1986	「山上会館竣工」(B)	東京大学本郷地区(本部、農学部、旧浅野邸、附属李病院本院)建物配置図



## 4-2 園内の動植物の概要 [T]

ここでは、育徳園を対象とした動植物の調査結果のうち確認されているものを整理して記載する。

### 1) 維管束植物（樹木・草本）

樹木調査として確認されたのは、平成5年・10年の農学生命科学研究科調査、および、平成15年の大学本部による調査（委託）によるものである。このうち、最新の平成15年に記載された1.5m以上の樹木とその本数は以下のとおりである（確認71種、計808本、枯木を含む）。なお、この資料には樹種「不明」が散見され、樹種の観点から情報が完全に正確であるとは断定出来ない。

表 4-2 平成15年調査での樹種ごとの本数

種名	本数	種名	本数	種名	本数
ミズキ	59	カラスザンショウ	7	ヤマボウシ	2
エノキ	52	サンゴジュ	7	アワブキ	1
ムクノキ	45	ウバメガシ	5	イテイ	1
シュロ	40	ゲッケイジュ	5	カスミザクラ	1
イロハモミジ	38	サザンカ	5	カナメモチ	1
ツバキ	37	ビワ	5	キササゲ	1
アカメガシワ	36	ヤマザクラ	5	クリ	1
イイギリ	33	カヤ	4	コウヨウザン	1
スダジイ	29	クロガネモチ	4	サルスベリ	1
ケヤキ	27	タラヨウ	4	サワラ	1
アカガシ	25	マユミ	4	シダレヤナギ	1
モチノキ	25	モッコク	4	シマホルトノキ	1
トウネズミモチ	23	アカマツ	3	ドイツウヒ	1
タブノキ	22	イチイガシ	3	ナツツバキ	1
シラカシ	17	イヌシデ	3	ヒトツバタゴ	1
イチョウ	16	イヌビワ	2	ヒノキ	1
マテバシイ	15	エンジュ	2	ヒロハノミミズバイ	1
イヌツゲ	14	オオシマザクラ	2	フジ	1
クスノキ	14	セイヨウトチノキ	2	ベニバナトチノキ	1
カジノキ	13	ソメイヨシノ	2	マツ	1
クロマツ	11	トウカエデ	2	モミジバズカケノキ	1
アラカシ	10	ハゼノキ	2	ヤマモモ	1
トチノキ	9	ヒイラギモクセイ	2	ユズリハ	1
アオギリ	8	ヒマラヤスギ	2	不明	80

また、平成5年、10年、15年の間の主要樹種の変化は以下のとおりである。

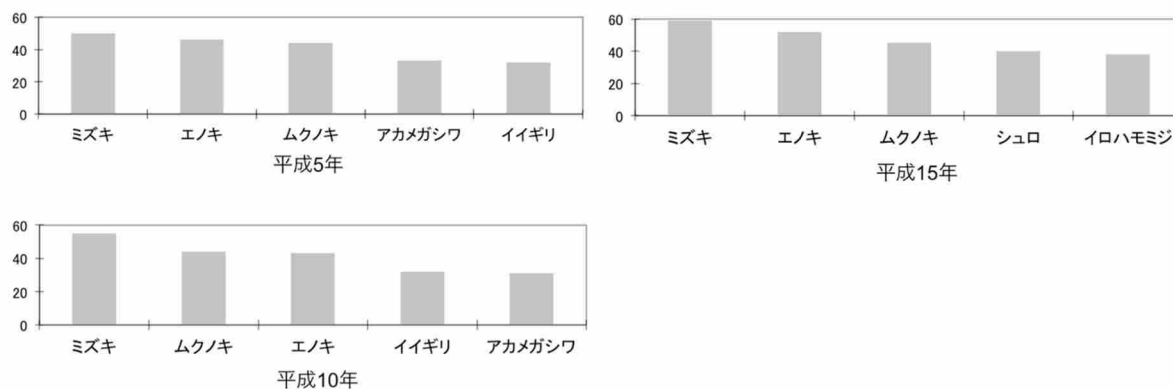


図 4-1 育徳園の主要樹木の変化（上位5種の本数）

出典：平成5、10年：「東京大学本郷キャンパスの樹木」東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻、2003。

平成15年：東京大学本部施設資産系保全グループ・環境グループによる毎木調査資料

低木層・草本層の植生の調査としては、加藤裕一氏（元・本学農学生命科学研究科）が2008年6月によるものがある。以下は樹高・草高2m以下の種の暫定的なリストである。

表 4-3 低木層・草本層の植物（2008. 6. 18、2m 以下）

科名	種名	学名
ワラビ	オオバノイノモトソウ	<i>Pteris cretica</i> L.
ワラビ	イノモトソウ	<i>Pteris multifida</i> Poir.
オシダ	イヌワラビ	<i>Athyrium niponicum</i> (Mett.) Hance
オシダ	ナガバヤブソテツ	<i>Cyrtomium devexiscapulae</i> (Koidz.) Ching
オシダ	オニヤブソテツ	<i>Cyrtomium falcatum</i> (L.f.) C.Presl
オシダ	ヤブソテツ	<i>Cyrtomium fortunei</i> J.Sm.
オシダ	シケシダ	<i>Deparia japonica</i> (Thunb.) M.Kato
オシダ	ベニシダ	<i>Dryopteris erythrosora</i> (D.C.Eaton) Kuntze
オシダ	ミドリヒメワラビ	<i>Thelypteris viridifrons</i> Tagawa
チャセンシダ	トラノオシダ	<i>Asplenium incisum</i> Thunb.
イネ	アシボソ	<i>Microstegium vimineum</i> (Trin.) A.Camus var. <i>polystachyum</i> (Franch. et Sav.) Ohwi
イネ	ケチヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i> (Ard.) Roem. et Schult.
タケ	アズマネザサ	<i>Pleioblastus chino</i> (Franch. & Sav.) Makino
タケ	オカメザサ	<i>Shibataea kumasasa</i> (Zoll.) Nakai
ヤシ	シュロ	<i>Trachycarpus fortunei</i> Wendl.
サトイモ	セキショウ	<i>Acorus gramineus</i> Soland.
ツユクサ	ツユクサ	<i>Commelina communis</i> L.
ユリ	ヤブラン	<i>Liriope platyphylla</i> Wang et Tang
ユリ	ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i> Ker.-Gawl.
ユリ	ナガバジャノヒゲ	<i>Ophiopogon ohwii</i> Okuyama
アヤメ	シャガ	<i>Iris japonica</i> Thunb.
アヤメ	キショウブ	<i>Iris pseudacorus</i> L.
ドクダミ	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.
ブナ	マテバシイ	<i>Pasania edulis</i> (Makino) Makino
ニレ	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planch.
ニレ	エノキ	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> (Planch.) Nakai
ニレ	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino
クワ	ヒメコウゾ	<i>Broussonetia kazinoki</i> Siebold
クワ	カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) I Herit et Vent.
クワ	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i> Thunb.
クワ	ホソバイヌビワ	<i>Ficus erecta</i> Thunb. f. <i>sieboldi</i> (Miq.) Corner
クワ	ヤマグワ	<i>Morus australis</i> Poir.
イラクサ	ヤブマオ	<i>Boehmeria japonica</i> (L.fil.) Miq. var. <i>longispica</i> (Steud.) Yahara
イラクサ	メヤブマオ	<i>Boehmeria platanifolia</i> Siebold et Zucc. ex C.H.Wright
タデ	ハナタデ	<i>Persicaria yokusaiana</i> (Makino) Nakai
ヒユ	ヒナタイノコヅチ	<i>Achyranthes fauriei</i> Lev. et Van.
メギ	ヒイラギナンテン	<i>Mahonia japonica</i> DC.
クスノキ	タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i> Siebold et Zucc.
クスノキ	シロダモ	<i>Neolitsea sericea</i> (Bl.) Koidz.
ユキノシタ	ガクアジサイ	<i>Hydrangea macrophylla</i> (Thunb.) Seringe
ユキノシタ	アジサイ	<i>Hydrangea macrophylla</i> (Thunb.) Seringe var. <i>otakusa</i> Honda
バラ	ヤマブキ	<i>Kerria japonica</i> (L.) DC.
マメ	クズ	<i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi
カタバミ	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i> DC.
トウダイグサ	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.
モチノキ	タラヨウ	<i>Ilex latifolia</i> Thunb.
ブドウ	ヤブカラシ	<i>Cayratia japonica</i> (Thunb.) Gagnep.
ツバキ	ツバキ	<i>Camellia japonica</i> L. var. <i>hortensis</i> Makino
ツバキ	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i> Thunb.
グミ	ツルグミ	<i>Elaeagnus glabra</i> Thunb.

ウコギ	ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i> (Thunb.) Decne. et Planch.
ウコギ	キツタ	<i>Hedera rhombea</i> (Miq.) Bean
ミズキ	アオキ	<i>Aucuba japonica</i> Thunb.
ミズキ	ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsl.
サクラソウ	コナスビ	<i>Lysimachia japonica</i> Thunb. var. <i>subsessilis</i> F.Maek.
エゴノキ	ハクウンボク	<i>Styrax obassia</i> Siebold & Zucc.
モクセイ	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i> Thunb.
モクセイ	トウネズミモチ	<i>Ligustrum lucidum</i> Aiton
ムラサキ	キュウリグサ	<i>Trigonotis peduncularis</i> (Trevis) Benth. ex Hemsl.
クマツヅラ	ムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i> Thunb.
クマツヅラ	クサギ	<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.
シソ	トウバナ	<i>Clinopodium gracile</i> (Benth.) Kuntze
ナス	ヒヨドリジョウゴ	<i>Solanum lyratum</i> Thunb.
オオバコ	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i> L.
アカネ	ヘクソカズラ	<i>Paederia foetida</i> L.
キク	オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i> (Retz.) Walker
キク	ハキダメギク	<i>Galinsoga quadriradiata</i> Ruiz et Pav.
キク	セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i> L.
キク	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i> Weber
キク	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i> (L.) DC.
ミカン	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Siebold et Zucc.
ムクロジ	モクゲンジ sp.	<i>Koelreuteria</i> sp.
シシガシラ	コモチンダ	<i>Woodwardia orientalis</i> Sw.

出典：加藤(私信, 2008)

育徳園の中の島部分の植生としては、同じく加藤裕一氏と北川淑子氏（元・本学農学生命科学研究科）により 2008 年 7 月に調査されたものがある。概ね上記のリストと同じ種が出現している。

表 4-4 島部分の植物リスト(2008. 7. 2 調査)

科名	種名	学名
オンダ	シケシダ	<i>Deparia japonica</i> (Thunb.) M.Kato
オンダ	ベニシダ	<i>Dryopteris erythrosora</i> (D.C.Eaton) Kuntze
マツ	クロマツ	<i>Pinus thunbergii</i> Parl
イネ	ケチデミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i> (Ard.) Roem. et Schult.
イネ	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i> Andersson
イネ	カモジグサ	<i>Elymus tsukushiensis</i> Honda var. <i>transiens</i> (Hack.) Osada
カヤツリグサ	エナシヒゴクサ	<i>Carex aphanolepis</i> Franch. et Sav.
カヤツリグサ	マスクサ	<i>Carex gibba</i> Wahlenb.
ヤシ	シュロ	<i>Trachycarpus fortunei</i> Wendl.
サトイモ	セキショウ	<i>Acorus gramineus</i> Soland.
アヤメ	キショウブ	<i>Iris pseudacorus</i> L.
ドクダミ	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.
ニレ	エノキ	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> (Planch.) Nakai
ニレ	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino
クワ	ヤマグワ	<i>Morus australis</i> Poir.
イラクサ	ヤブマオ	<i>Boehmeria japonica</i> (L.fil.) Miq. var. <i>longispica</i> (Steud.) Yahara
ヒユ	ヒナタイノコヅチ	<i>Achyranthes fauriei</i> Lev. et Van.
クスノキ	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i> (L.) Presl
クスノキ	タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i> Siebold et Zucc.
バラ	サクラ sp	<i>Prunus</i> sp.
ミカン	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Siebold et Zucc.
トウダイグサ	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.
ウルシ	ハゼ	<i>Rhus succedanea</i> L.
モチノキ	クロガネモチ	<i>Ilex rotunda</i> Thunb.
カエデ	イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i> Thunb.
カエデ	トウカエデ	<i>Acer buergerianum</i> Miq.

ブドウ	ツタ	<i>Parthenocissus tricuspidata</i> (Siebold et Zucc.) Planch.
ミズキ	ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsl.
ミズキ	アオキ	<i>Aucuba japonica</i> Thunb.
ツツジ	オオムラサキツツジ	<i>Rhododendron x pulchrum</i> Sweet 'Oomurasaki'
モクセイ	トウネズミモチ	<i>Ligustrum lucidum</i> Aiton
アカネ	ヘクソカズラ	<i>Paederia foetida</i> L.
ウリ	キカラスウリ	<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> (Miq.) Kitam.
キク	セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i> L.

出典：加藤(私信, 2008)

## 2) 昆虫

確認可能な調査結果のうち、矢後ら(2011)が育徳園のトンボ類について、2001年～2011年の間に確認されたものとして以下の20種を挙げている。

アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、オオアオイトトンボ、ヤブヤンマ、マルタンヤンマ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、オオヤマトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、コフキトンボ、ショウジョウトンボ、アキアカネ、ナツアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボ、チョウトンボ

出典：矢後勝也・須田真一・河合秀樹(2011)大学キャンパスの昆虫相(7)東京大学本郷地区キャンパス。昆虫と自然、46(14)、37-39.

また同じく矢後ら(2011)が、本郷キャンパス内で近年確認された31種のチョウ類と14種のカミキリ類を挙げているが、そのうちどの程度が育徳園に生息しているかは不明である。

地表性昆虫については、2008年9月に吉岡明良氏(当時：本学大学院農学生命科学研究科)が調査した記録がある。この調査も1日だけの限定的なものであり、蝶類なども含めた総合的な昆虫の調査の記録は見つかっていない。

表 4-5 2008年調査により確認された地表性昆虫

科名	種名	学名
甲虫類コメツキムシ科	ホソサビキコリ	<i>Agrypnus fuliginosus</i>
甲虫類ゾウムシ科	チビヒョウタンゾウムシ	<i>Myosides serienispidus</i>
アリ類アリ科	アメイロアリ	<i>Paratrechina flavipes</i>
アリ類アリ科	キイロシリアゲアリ	<i>Crematogaster osakensis</i>
アリ類アリ科	ムネボソアリ	<i>Leptothorax congruus</i>
アリ類アリ科	オオハリアリ	<i>Pachycondyla chinensis</i>

出典：SiLR(2009)三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書. 37-39.

## 3) 鳥類

調査資料として見つかっているのは、加藤和弘氏(元・本学農学生命科学研究科)および橋本英奈氏(本学農学生命科学研究科)による資料のみである。調査時期は2015年およびそれ以前の数年以内(時期不明)である(一部は、加藤和弘(2005)シリーズ応用動物科学/バイオサイエンス11 都市のみどりと鳥、朝倉書店 pp.13)。

表 4-6 近年、育徳園で確認された鳥類

種名	時期	備考
スズメ	一年中	陸鳥
ツバメ	夏季	陸鳥
ムクドリ	一年中	陸鳥
オナガ	越冬期	陸鳥
キジバト	一年中	陸鳥
シジュウカラ	一年中	陸鳥
ツグミ	越冬期	陸鳥
ハシブトガラス	一年中	陸鳥
ヒヨドリ	一年中	陸鳥
メジロ	越冬期	陸鳥
アオジ	越冬期	陸鳥
アカハラ	越冬期	陸鳥
ウグイス	越冬期	陸鳥
カワラヒワ	越冬期	陸鳥
キビタキ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
クロツグミ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
コゲラ	一年中	陸鳥
コマドリ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
コルリ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
シメ	越冬期	陸鳥
シロハラ	越冬期	陸鳥
センダイムシクイ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
ハクセキレイ	一年中?	陸鳥
ホオジロ	越冬期	陸鳥
メボソムシクイ	夏季	陸鳥 渡りの通過個体
モズ	越冬期	陸鳥
ドバト	一年中	陸鳥
ワカケホンセイインコ	一年中	陸鳥
カルガモ	一年中	水鳥
マガモ	越冬期	水鳥
カワセミ	夏季	水鳥

出典：加藤(2005); 橋本(私信, 2015)

#### 4) 水生生物（節足動物・魚類・両生類・爬虫類）

調査記録としては、2008年9月に宮崎祐介氏（元・本学農学生命科学研究科）によって調査されたもののみ確認されている。その際に確認された種は以下のとおりである。

表 4-7 近年、育徳園で確認された鳥類（宮崎、未発表）

科名	種名	学名
節足動物門甲殻綱十脚目アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>
節足動物門昆虫綱カメムシ目アメンボ科	アメンボ	<i>Aquarius paludum</i>
脊椎動物門条鰭綱コイ目コイ科	コイ	<i>Cyprinus carpio</i>
脊椎動物門条鰭綱コイ目コイ科	モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>
脊椎動物門条鰭綱スズキ目サンフィッシュ科	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>
脊椎動物門条鰭綱スズキ目サンフィッシュ科	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>
脊椎動物門条鰭綱スズキ目ハゼ科	トウヨシノボリ	<i>Rhinogobius sp. OR</i>
両生綱カエル目アカガエル科	ウシガエル	<i>Rana catesbeiana</i>
爬虫綱カメ目スッポン科	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
爬虫綱カメ目ヌマガメ科	ミシシッピアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>

出典：SiLR (2009) 三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書. 37-39.

## 5) その他の生物相

本学理学部所属教員らによって、2011年頃から育徳園の生物相調査が行われている（未発表資料）。その調査によれば、上記以外の生物相についても以下のことが明らかになりつつある。

陸産貝類（カタツムリ）…少なくとも25種が確認されており、東京都心としては多くの種が生息している。この中には、東京都心では皇居と育徳園のみでしか確認されていないムシオイや、採集記録の少ないサツマオカチョウジガイやマルシタラなども含まれる。また、6種が育徳園や本郷キャンパス周辺をタイプロカリティ（タイプ標本が収集された場所）としている。

甲虫…少なくとも4種が確認されている。特にムネアカツヤケシコメツキは東京都における記録が数十年で1例のみの極めて珍しい種である。

クモ類…少なくとも52種が確認されている。

## 4-3 園内の水環境の概要 [O, H]

### 1) 水の供給経路

育徳園心字池への水の供給経路は、次の三つの経路がある。なお、これらとは別に、水の循環を促進するために心字池内にポンプが設置してあり、文学部3号館側の滝から落としている。

#### ① 雨水の浸透

雨水が育徳園およびその周囲の土壤に浸透し供給される経路である。

#### ② 雨水排水路

御殿下グラウンドおよび山上会館周辺、法学部4号館周辺の雨水排水路が育徳園に接続されており、排水路を通して雨水が供給される経路である。

#### ③ 井水の汲み上げ

藤棚の井戸より、タイマーで30 m<sup>3</sup>/日を汲み上げ、法学部4号館周辺の雨水枡に流出させ、雨水配管を通して供給される経路である。

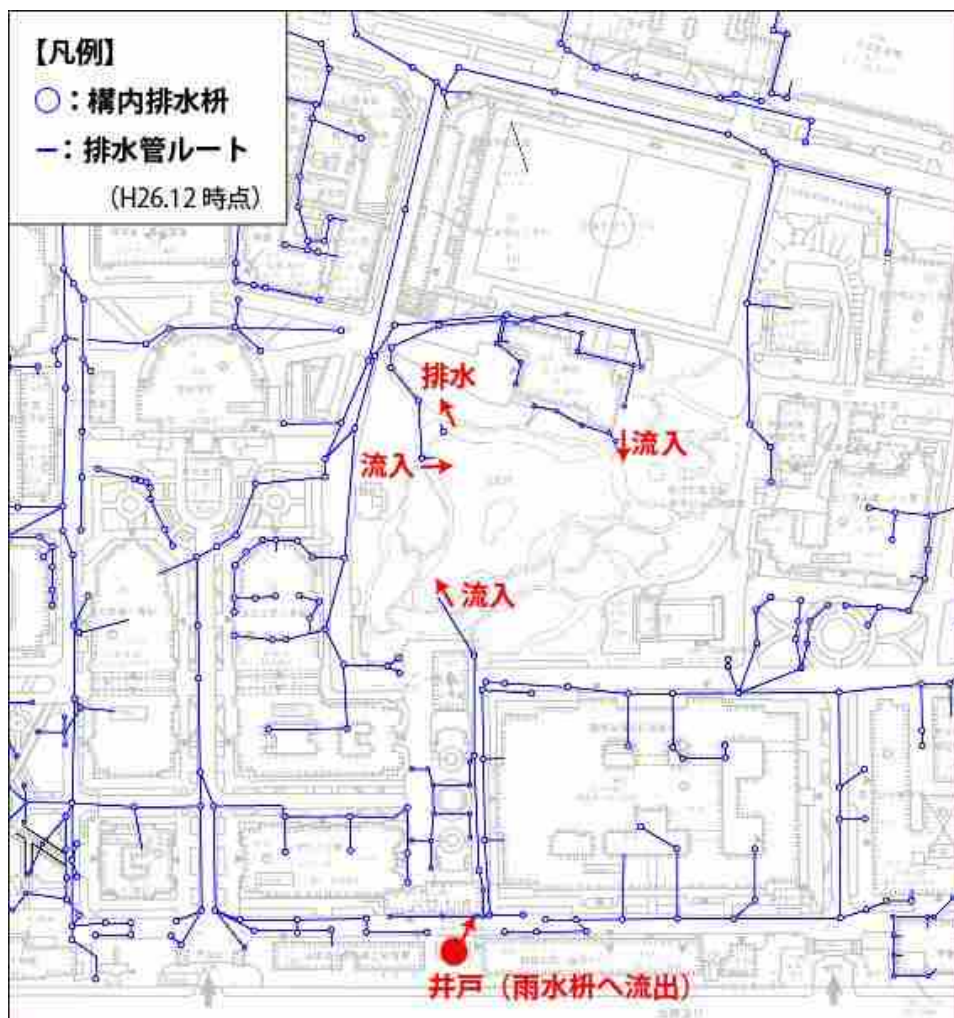


図 4-2 周辺の排水系統を利用した育徳園心字池への水の供給経路・排水溝の位置

## 2) 育徳園心字池の水位と降水量

2015年8月～12月まで育徳園の池の水位計測を擬木橋と排水溝で行い、水位と降水量のグラフを作成した。最低水位は8月25日の48cm、最高水位は12月11日の106cm。適正水位を『写真集東京大学』（1960年）掲載写真の水位とすると、適正水位は飛び石上面よりやや低い水位、2015年9月10日の86cm、排水溝の水位は16cmとなる。現在、水位は1日1cm低下している。池の面積を3,000㎡とすると1日30㎡の水が地下に浸透する計算になる。現在、地下水を1日30㎡供給していることから1日60㎡の水が地下に浸透する計算になる。水位の低下により飛び石の高さ調節、護岸の土留めに使用されているレンガ、コンクリート塊が現れる。『写真集東京大学』当時は湧水と雨水、排水量と地下浸透量のバランスが保たれ水位が維持されたと考えられる。降雨で排水溝の水より水位が高くなり適正水位になっても排水溝から排水されてしまう。9月9日の降雨で上昇した水位は、翌日16cm低下している。給水量を30㎡増やして60㎡にし、排水溝の底を16cm高くすれば適正水位が維持される。

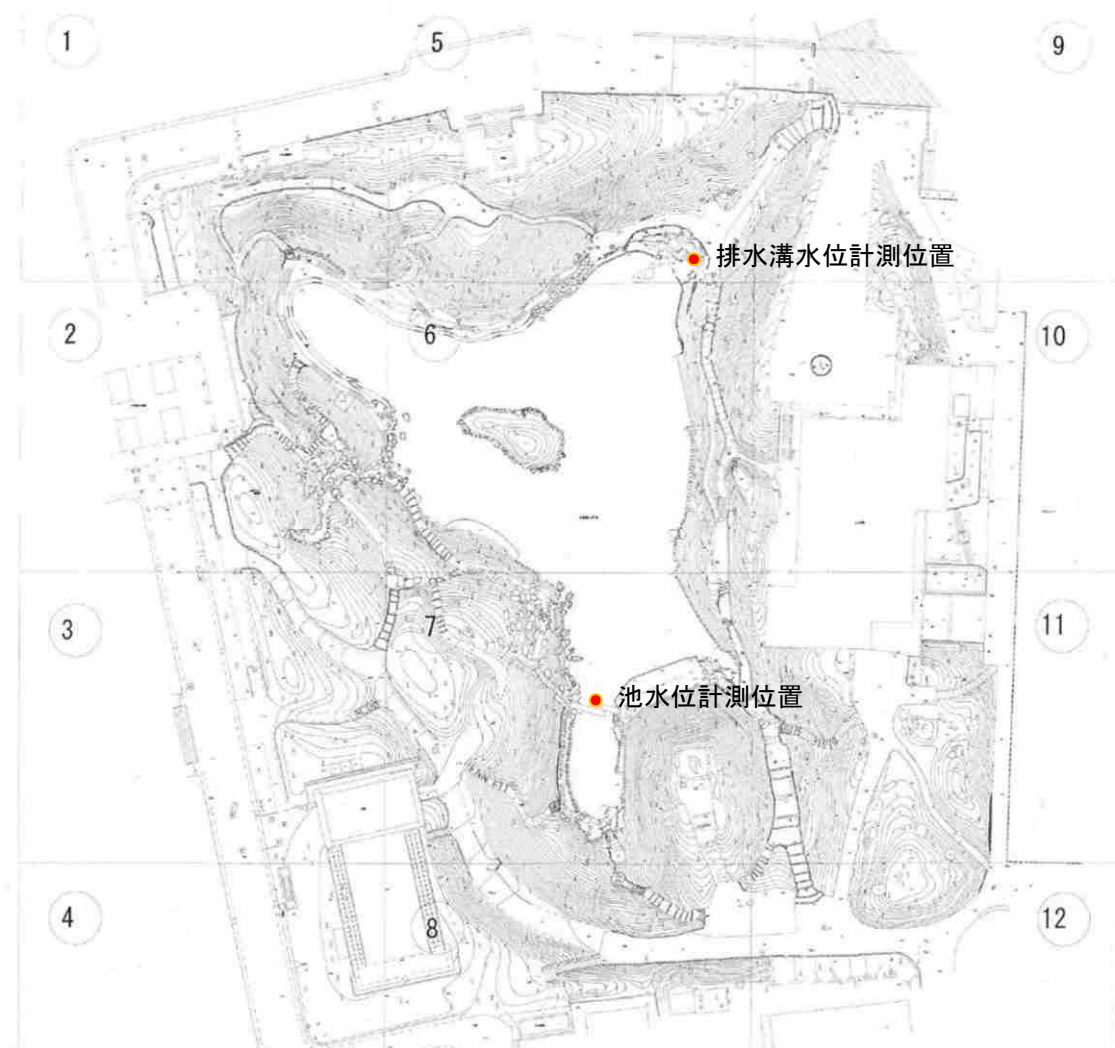


図 4-3 水位計測位置



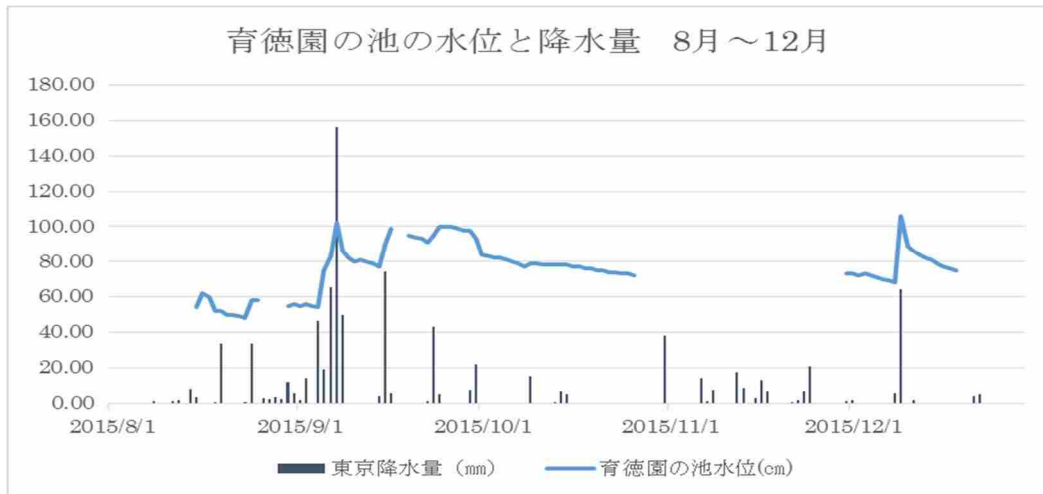


図 4-4 育徳園の池の水位と降水量グラフ



写真 4-1 入口 2015年9月10日  
池水位 86cm、排水溝水位 16 cm

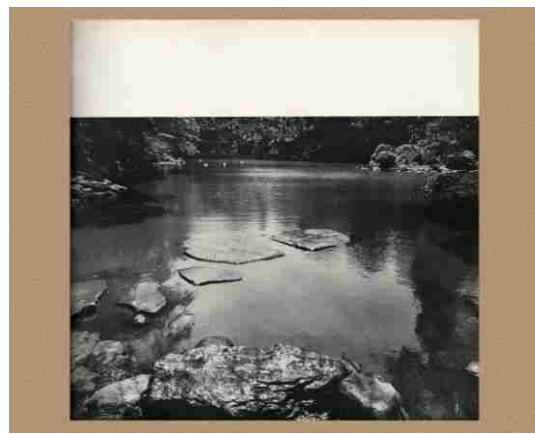


写真 4-2 『写真集東京大学』(1960年)



写真 4-3 入口 2015年8月25日  
池水位 48cm

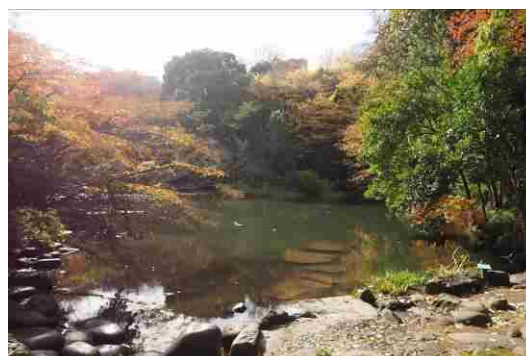


写真 4-4 入口 2015年12月11日  
池水位 106 cm、排水溝水位 25 cm



写真 4-5 飛石 (2015 年 8 月 24 日)



写真 4-6 護岸 (2015 年 8 月 24 日)



写真 4-7 南西池尻 (2015 年 8 月 24 日)



写真 4-8 北西池尻 (2015 年 8 月 24 日)



写真 4-9 擬木橋の水位計測



写真 4-10 排水溝の水位計測

## 4-4 キャンパス計画における位置づけ [O]

### 1) 東京大学キャンパス計画大綱における位置づけ

平成 26 年に策定された東京大学キャンパス計画大綱において、育徳園に関連の深い箇所として次のような一節がある。

大綱は東京大学のキャンパス計画の中で最高位のものであり、ここで明快に「本郷地区キャンパスの歴史的空間構造及び景観」の価値を継承することが第一義的な目標であることが宣言されていることに留意すべきである。

#### 前文

東京大学のキャンパスは、学問の府としての教育・研究の理念と精神を養う土壌であり、大学の魅力と独自性をもっとも直截に表現し、構成員および第三者に伝える媒体である。建築群、道、広場、緑地等からなるキャンパス空間は、すべての学生・教職員にその価値が等しく開かれるとともに、前記土壌として十分ふさわしい質を備えるよう計画され、整備されることが重要である。

#### 本郷地区キャンパス

本郷地区キャンパスは、近代的総合大学として国内でもっとも長い歴史を有し、かつ、近代日本国家の発展に貢献してきた本学のみが有する、歴史的風格に富む固有の空間構造と景観を有する。国内はもとより海外においても、この点において比肩し得る対象は少ない。同キャンパスの景観は、未来へと譲り伝えるべき日本の財産とさえ言うことができる。本学はこれが全学共通の財産であることを認識した上で、将来へ向けたマスタープランを構築する。

このため、東京大学のアイデンティティの象徴および基盤として、本郷地区キャンパスの歴史的空間構造及び景観（建築群および外部空間）の価値を将来にわたって継承することをキャンパス計画の第一義的な目標とする。そのうえで、知の最先端を担い、時代の要請に応じた学問の責務を果たすために必要な施設等の機能の更新（増改築および新築等）は、積極的かつ継続的に実現されなければならない。その際、各部局の教育・研究活動を展開する施設計画の趣旨を尊重しつつ、常に全学的視点から、地区全体としての理念の一貫性を保持した計画・整備を行う。

出典：東京大学（2014）東京大学キャンパス計画大綱. 1-2.（傍線部筆者）

### 2) 本郷地区キャンパス計画要綱における位置づけ

平成 23 年に策定された本郷地区キャンパス計画要綱における育徳園の位置づけを整理する。

#### フレームワーク

育徳園は「主外部空間」として位置づけられており、西側の通りが主軸として位置づけられている。

#### 配慮すべき基本的な事項

フレームワークとして設定された軸線や外部空間は、キャンパス全体でその質を守り、向上させるべき重要な公共空間であるため、施設等の整備・改修等に合わせて、それらの質を向上させるよう配慮すること。また、キャンパス全体の持続可能性を確保するように整備・改修等を行うこと。

- ・ 軸線に接する場所（外部空間境界部）にオープンスペースをとる。
- ・ 日常的な維持管理においても、それらの質を適切に維持すること。

### キャンパスの質について配慮すべき事項

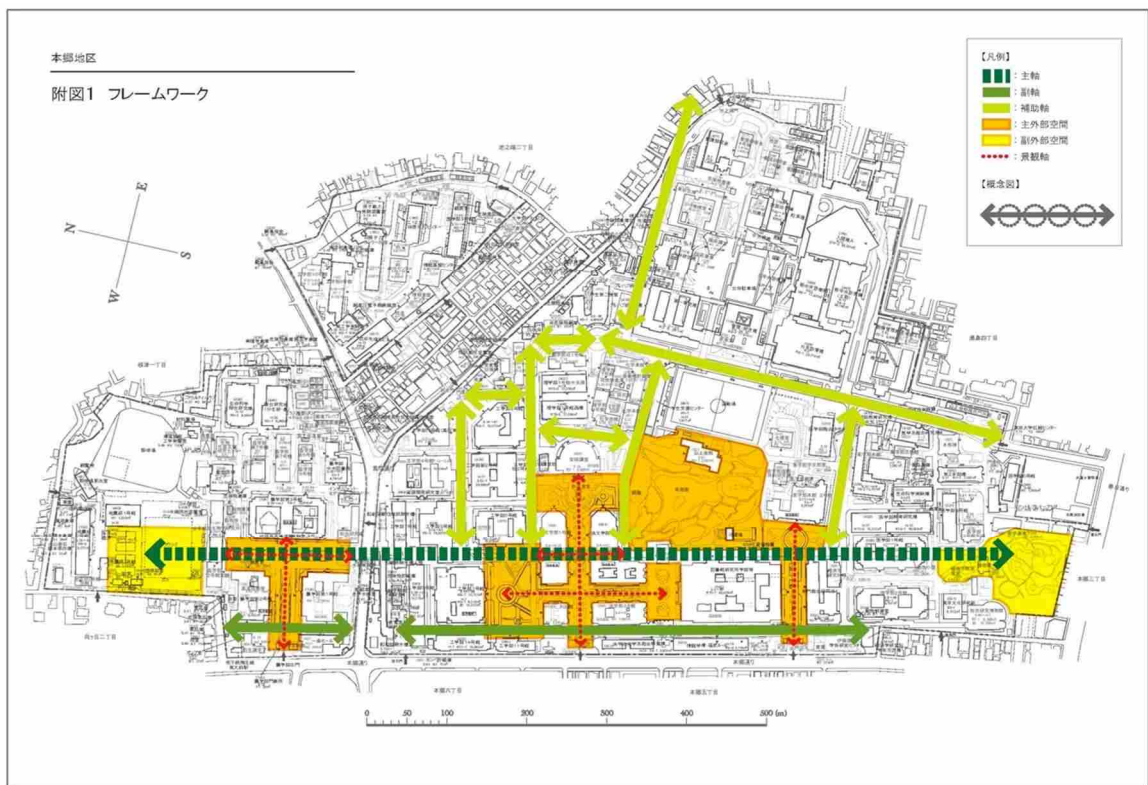
歴史的な蓄積を最大限活用し、本学の中核にふさわしい「風格あるキャンパス」を形成する。また、先進的な研究教育活動の場として、近未来のニーズに対応した外部環境と施設構成を創出する。

- ・強い象徴性：安田講堂と三四郎池を中心とした歴史性を中心に据える。
- ・時間の調和：過去から未来へと貫く時間のイメージを創出する。

### 建築物のデザインについて配慮すべき事項

エリアコードに沿って、適切かつ戦略的にデザインの質を確保する。歴史的な区域と現代的な感性を活用する区域の違いを設計に適確に反映させる。

- ・厚みの設計：外観は、好ましいエイジングをもたらす重厚かつ落ち着いた素材を基調とする。
- ・歴史の継承：内田ゴシックに代表される「歴史性」を最大限活用する。



出典：東京大学（2010）本郷地区キャンパス計画要綱. 3-5. (傍線部筆者)

### 歴史的空間と保存建造物

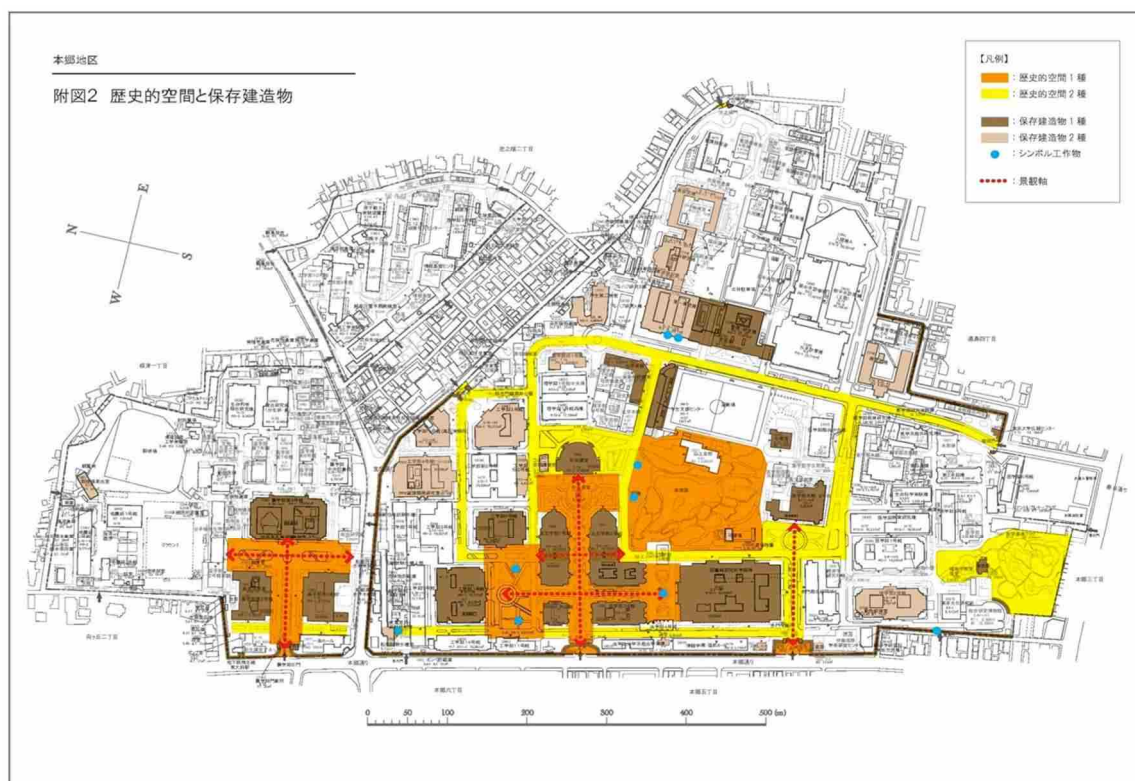
育徳園は「歴史的空間1種」として位置づけられており、弓道場及び弓道場物置が「保存建造物2種」、浜尾新像、ポンプ跡が「シンボル工作物」に位置づけられている。

### 歴史的空間への配慮

歴史的空間の改変に至る行為の際には、その空間を構成している施設や樹木等の配置及び細部や意匠・構造の双方に十分配慮した検討を行うこと。また、日常的な維持管理においても、それらの質を適切に維持すること。

## 保存建造物 2 種・シンボル工作物

現存の状態を保存することを検討する。困難な場合は、外壁保存を検討する。外壁保存が困難な場合は、キャンパス計画室の下で他の保存手法を検討する。また、日常的な維持管理においても、それらの質を適切に維持できるよう配慮すること。



出典：東京大学（2010）本郷地区キャンパス計画要綱. 7-10.（傍線部筆者）

## 緑・自然環境

育徳園は「緑地」として位置づけられており、西側・北側の通りが「プロムナード」に位置づけられている。

## プロムナード

キャンパス内を快適に移動や散策ができるよう、必要な緑陰やその他場所に応じた植栽を保全・創出すること。

## 緑地

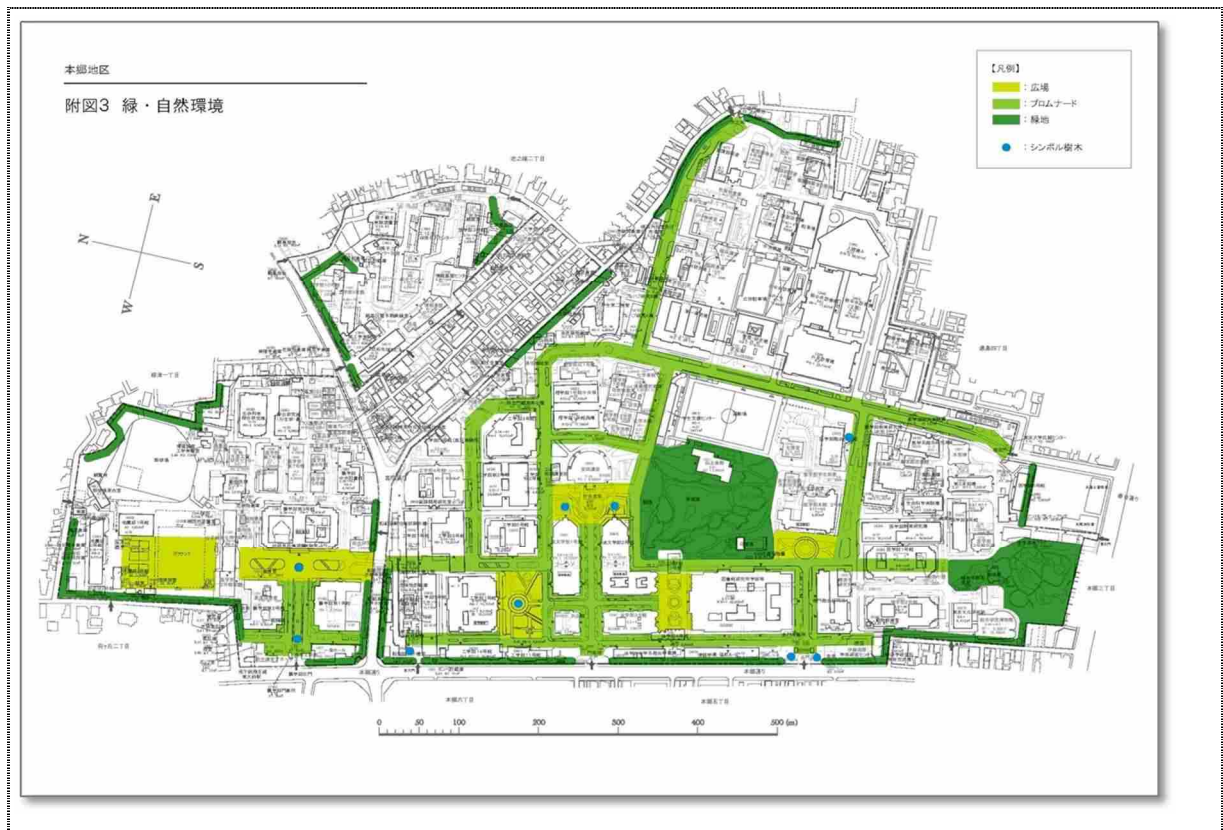
キャンパスや周辺地域において緑地は貴重であり、原則として保全すること。また、歴史的空間を構成する主要素となっている緑地では、樹木の伐採などの操作には特に慎重を期すこと。

## 生態系への配慮

大規模な樹木の伐採については運用指針による。また、必要に応じて環境への影響を調査すること。

## 維持管理

管理局は維持管理を適切に実施し、良好な保全に努めること。



出典：東京大学（2010）本郷地区キャンパス計画要綱. 11-13.（傍線部筆者）

### 3) 本郷地区キャンパス整備計画概要における位置づけ

平成 17 年に策定された本郷地区キャンパス整備計画概要において、育徳園は第 1 段階の整備対象地区として指定されている。なお、「第 1 段階」とは現状において建築可能な敷地があるなど、物理的に直ちに実施可能なものとされており、その整備時期は明示されていない。その整備計画内容については「エコロジカルな環境維持機能を充実し、キャンパスの快適性を増進するため」とあり、整備面積など具体的な計画は示されていない。

出典：東京大学（1999）本郷地区キャンパス 第 3 次整備計画概要. 1-7.（傍線部筆者）

### 4) キャンパス内パブリックスペース検討 WG 報告書における位置づけ

平成 19 年にキャンパス計画室会議で報告された標記報告書には、育徳園が「庭園」として位置づけられ、その整備構想が策定されている。この報告書は「実際の整備に際しユニバーサルデザインへの配慮を必要とする」という意見を付した上で、キャンパス計画室会議で了承されている。なお、130 周年の「知のプロムナード事業」による整備を念頭におき、整備効果が高いものの整備優先度を上げるとしており、育徳園は第一期整備に指定されているが、整備案は図書館側の通路に接した緑地帯部分のみを対象としている。以下に関連の深い箇所を抜粋する。

## II 構想の目標—キャンパスのパブリックスペース再生

### 1) 歴史的環境の継承

（省略）

### 2) 歩行者空間としてのキャンパス環境の実現

キャンパスは大学における知的活動を支える場であるとともに、学生や教職員が思索し、憩い、語り合うことのできる安全で快適な空間でなければならない。現在のパブリックスペースの車道的なあり方を根本的に変え、キャンパスを歩行者のための空間として再編する。

### 3) キャンパスの一体性、統一性の強化

(省略)

### 4) 交流など日常的に活用できる場の確保

(省略) 本郷キャンパスのパブリックスペースは、これまで修景を目的として整備されており、今後は活用型への転換をはかってゆく。

### 5) 緑豊かな潤いある環境の整備

パブリックスペースがキャンパスの一体性、統一性を高め、交流や思索の場となるには、緑豊かな潤いのある環境の整備が必要である。場の性格に応じ、あるいは地区や部局の特徴をも加味しながら、緑の計画的な整備と効果的な維持保全を行なう。

### 6) パブリックスペースの創出・整備、維持・管理を円滑に進めるためのしくみの確立

(省略)

## IV 方法

### 2) スペース特性の区分

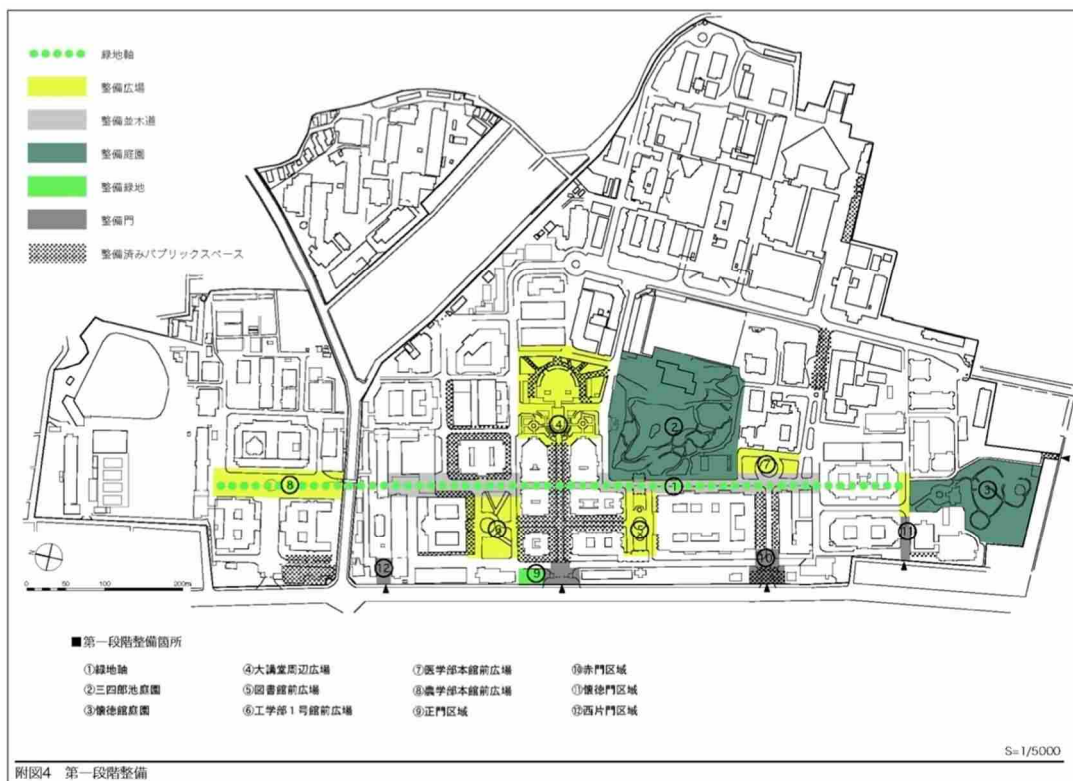
パブリックスペースの位置や利用状態、周辺の建物や植栽の様態などを踏まえ、次のようにパブリックスペースの特性を区分する。それぞれの趣旨に従って整備し、キャンパス全域に多様性にとんだ快適な環境を創出する。附図2 に各特性のスペースの配置を示す。

- a) 広場 : 植栽と舗装がなされ、憩いと交流の場となる広場状空地
- b) 並木道 : 主要緑地軸、副次的緑地軸など良好な並木を備えた舗装された線状の空地
- c) 緑地 : キャンパス外周の緑地帯など植栽により緩衝や滞留の機能を供する空地
- d) 庭園 : 庭としての植栽やしつらえがなされた場で、回遊のための苑路を備える。
- e) 門 : 主要な門周辺の区域



### 3) 歩行者区域の指定

安全で快適なパブリックスペースを整備し静穏なキャンパスを実現するため、附図3 のとおり専ら歩行者（自転車含む）が利用、通行する歩行者区域を指定する。ただし必要最小限の車両横断等は可能とする。







現状



整備イメージ

- 整備内容
- ・三四郎池へ入るスペースは、灌木伐採などの植栽整備と、园路整備を行い、人々が入りやすくする。
  - ・ベンチを配置し、人々が憩える場所とする。
  - ・屋台が開けるような賑わいのある場所とする。

整備箇所番号 ②

参考図4：三四郎池庭園西側 整備イメージ

出典：キャンパス内パブリックスペース検討WG(2007) キャンパス内パブリックスペース検討WG 報告書(傍線部筆者)

## 4-5 学生や教職員による利用状況 [T]

### 1) 利用状況のアンケート調査

育徳園の利用状況を把握したおそらく唯一のものとして、2009年に刊行された「三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書」の利用調査報告（執筆者：小野田哲郎、元・本学大学院新領域創成科学研究科）がある。以下はその内容の抜粋である。

調査方法の概要は以下のとおりである。まず、学生・教職員 19 人に対する育徳園の利用に関するインタビュー調査（2008年5月に実施）を通してアンケートの質問項目の作成・検討を行い、学生・教職員 83 人に対する予備調査（2008年6月に実施）を行ってアンケート票の有効性の検討を行った。調査（2008年8月～11月に実施）では、学生に対しては調査員がアンケート票の配布・回収を行い、有効回答 291 部（本郷キャンパスの学生総数約 18,500 人）を得た。教職員に対しては郵送にて配布・回収を行い、有効回答 415 部（本郷キャンパスの教職員総数約 3,500 人）を得た。それぞれ信頼率 95%で 6%以下の精度があった。全 706 人の回答者の属性内訳として、男性 70%女性 30%で、年齢は 20-25 歳を中心に幅広い年代に分布し、学生 41%（大学院生 28%、学部生 13%）、教職員 59%（教員 22%、職員 37%）であった。

### 2) 利用状況の概要

- ・ これまでに育徳園に行った回数や頻度

3 回以上行ったことがあると回答した割合は 75%を超えており、多くの方が育徳園を利用しているといえる。21 回以上行ったことがあると回答した割合も 25%を超えており、リピーターとして育徳園に通っている方も多いことも伺える。なお、今回の調査では大学で長く生活している教職員の回答比率が高いために、育徳園に行った回数が多いと回答した割合が高いことに影響していることを断っておく。学生では 1～5 回と回答している割合が高かった。育徳園に行く頻度は年 1、2 回と回答する割合が高かった。

- ・ 育徳園の利用内容

散歩で利用するという人の割合は 75%を超えていた。その次はキャンパス内の移動の際の通り抜けで利用するという人で、その割合は 52%であった。休憩で利用するという人の割合は 40%であった。その他の利用としては、学外者に東大を案内する際に育徳園に行くという回答が見られた。

- ・ 育徳園のイメージ（自由回答）

主要なものとして、落ち着ける空間であり、オアシスのような空間であるというものがあつた。また、東大のシンボル、小説『三四郎』、歴史的な場所などの評価も見られた。反対に、育徳園は暗くてうっそうとしているという負のイメージも挙げられた。

- ・ 気に入っている場所や利用しない場所とその理由

最も気に入っている場所を図 4-5 の A～I のエリアから 1 つ選択してもらった。この結果、気に入っている場所として C、A エリアを挙げる割合が多かった。それらの場所を気に入っている理由の 1 番としては「眺めが良いから」、2 番としては「ひっそりとして静かだから」というものが挙げられた。C を気に入っている 3 番目の理由は「休憩できるから」であり、A では「付近の施設を利用したついでに行けるから」であった。逆に利用しない場所についてみると、G や D といった池の南西側があげられた。利用しない理由としては、1 番に「そもそも自分が歩くルートに入っていない場所だから」、2 番に「歩きにくい場所だから」、3 番に「うっそうとした雰囲気だから」であった。



図 4-5 育徳園の利用調査上のエリア分け

・ 変わってほしくないことと行ってほしい整備

本質問では、変わってほしくないことを選択肢から上位 3 つまで選択してもらった。この結果、「ひっそりとして静かな雰囲気」「休憩できる場所」「回遊できる園路」などが上位に挙げられた。

逆に行ってほしい整備として、「水質などの池の水の管理を行う」「より歩きやすいようにする」「より休憩しやすいようにする」などが選ばれた。

自由回答でも、自然や静けさの維持、水質の改善、歩きやすさの改善が要望として多かった。

3) 利用状況のまとめ

- ・ 静かで落ち着いた雰囲気のある環境を好まれ多くの散策利用があり、そのような雰囲気をもたらしている豊かな自然環境の維持が望まれていた。
- ・ 一方で、眺望の改善、歩行のしやすさの向上、池の水質の管理、樹木の剪定、歩道の修繕等の日常の維持管理を行うことが改善点として望まれていた。
- ・ なお、本利用調査は学生や教職員の一部の回答であり、利用者の総意ではないこと、また利用者の意識は時代とともに変わるものであることに考慮する必要がある。

#### 4-6 工事履歴 [S]

昭和 49 年（1974 年）にキャンパス内の土地利用計画が発表されてから、育徳園内では様々な工事が行われてきた。施設部で把握出来た工事を屋外環境整備、樹木剪定等、池工事（護岸、浚渫、循環整備等）の 3 つに分類し、現在の測量図上に記載した。

##### 1) 屋外環境整備

図 4-6 「屋外環境整備」参照。

##### 2) 樹木剪定等

図 4-7 「樹木剪定等」参照。

##### 3) 池工事（護岸、浚渫、循環整備等）

図 4-8 「池工事（護岸、浚渫、循環整備等）」参照。





# 池(護岸、浚渫、循環整備等)



※平成15年度測量図表用C号図

8=1:390(A1)

## 補遺 遺跡調査の手順 [H]

仲隆裕は文化財庭園の修復手順について、「まず等高線および主要地点の標高を示した実測図面（平面図・立面図）を作成し、之を詳細に検討することによって自然の営力による漸次的な変容を把握することから始まる。ついでこれを基本図として、発掘調査等意向調査を行い、その結果と古図・古写真・文献史料の成果を照合し、作庭時およびそれ以降の変容過程、毀損の箇所や規模、毀損原因を実証的に解明・把握し、保存計画を定める。実測平面図は庭園の規模にもよるが、1/50 ないし 1/100 程度の縮尺で、護岸石組み等の修復にあたっては縮尺 1/20 が望ましい。等高線間隔は 10 ないし 20 cm 間隔とし、国土座標にそった図面とする。修復前と修復後のみならず修復工事の過程についても記録にとどめる。修復内容の記録には、工事にあたって材料と方法を選択した明確な理由を述べ、過程を示す図・写真添えるものとする。特に文化財庭園の状態や修復のための材料に関する記録は重要である。新規材料を追加あるいは転用した際には、その情報も図面に記入すると共に、新規材料であることを示すための他たとえば石であれば刻印を施しておく。」と述べている。

育徳園の遺構研究は埋蔵文化財調査室が遺跡調査を行った山上会館・御殿下記念館地点、御殿下グラウンド地点で現在の山上会館とグラウンドの遺跡調査が行われ、調査地点で検出遺構と絵図の照合が行われている。育徳園については庭園図、絵図、文献史料の検討が行われている。育徳園については考古学、文献史学の分野から検討が行われている。しかし、文化財庭園研究の視点による研究は行われていない。修復のための測量を早急に開始することはできないが、「東京大学本郷キャンパス敷地測量図」に育徳園の池部分の測量図がある。修復に使用するには不十分な図面であるが、この測量図をベースに現地調査を行い、江戸時代と明治時代以降の遺構を示す。園内で明治時代から現在までに行われた工事と合わせ、明治時代以降の改変等について検討をする。文献史料、絵図、庭園図、古写真について文化財庭園研究の視点から検討し、庭園の構造、景観、仕掛を藩邸の変遷と合わせて検討、遺跡調査を行い遺構の年代を明確にする。1688 年の「武州本郷第図」とこれ以降の絵図を比較すると、「武州本郷第図」では育徳園の池南側には傘御亭の台地の張り出しは確認できず、南西方向から池につながる谷である。台地の張り出しが自然地形で関東ローム層の自然堆積であるか、盛土であるかによって傘御亭の整備方法も変わってくるため、少なくとも整備部分については遺跡調査を行う必要がある。

参考文献：

仲隆裕 2003 「文化財庭園の修復技術」 京都造形芸術大学日本庭園センター『庭園学講座 X 文化財庭園の保存管理技術』 p22



## 参考文献一覧

- 加藤和弘 (2005) 『シリーズ応用動物科学／バイオサイエンス 11 都市のみどりと鳥』、朝倉書店。
- 岸田省吾(1997) 東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究、東京大学学位論文。
- キャンパス内パブリックスペース検討WG (2007) キャンパス内パブリックスペース検討WG 報告書
- 近藤磐雄(1909) 加賀松雲公上巻, 羽野知頭。
- 阪口豊(1990) 東京大学の土台—本郷キャンパスの地形と地質—、東京大学史紀要、8、1-33。
- 東京大学 (2014) 東京大学キャンパス計画大綱。
- 東京大学 (2010) 本郷地区キャンパス計画要綱。
- 東京大学 (1999) 本郷地区キャンパス 第3次整備計画概要。
- 東京大学医学部百年史編集委員会(1967) 東京大学医学部百年史、東京大学出版会。
- 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会(1988): 『東京大学本郷キャンパスの百年』、東京大学総合研究資料館。
- 東京大学百年史編集委員会(1984) 『東京大学百年史通史 2』、東京大学出版会。
- 東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻(2003) 『東京大学本郷キャンパスの樹木』
- 東京大学埋蔵文化財調査室(1990) 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 2 東京大学本郷構内の遺跡 法文 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』、東京大学埋蔵文化財調査室。
- 東京大学埋蔵文化財調査室(1990) 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 4 山上会館・御殿下記念館地点第1分冊』、東京大学埋蔵文化財調査室。
- 東京大学埋蔵文化財調査室(1990) 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 4 山上会館・御殿下記念館地点第3分冊 考察編』、東京大学埋蔵文化財調査室。
- 東京帝国大学(1932) 『東京帝国大学五十年史 下巻』、東京帝国大学。
- 東京帝国大学庶務課(1940) 附 赤門と育徳園、『懐徳館の由来』、東京帝国大学。
- 中島穰・中井祐・内藤廣(2010) 「東京大学本郷キャンパス 育徳園の変遷とその要因」 景観・研究講演論集 N06 pp116-119
- 仲隆裕 (2003) 「文化財庭園の修復技術」、京都造形芸術大学日本庭園センター『庭園学講座X 文化財庭園の保存管理技術』。
- 夏目漱石(1908) 『三四郎』、春陽堂。
- 西秋良宏(2000) 加賀殿再訪、『東京大学本郷キャンパスの遺跡』、東京大学総合研究博物館。
- 森下徹(1990) 第1章3節「育徳園」、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』、東京大学埋蔵文化財調査室。
- 矢後勝也・須田真一・河合秀樹 (2011) 大学キャンパスの昆虫相(7) 東京大学本郷地区キャンパス、昆虫と自然、46(14)、37-39。
- SiLR (2009) 「三四郎池のランドスケープ・リノベーション成果報告書」